緑色閃光（８）

　サイダ＝ド＝フーはジェイクジブラスから１００キロメートル北にある街で、ジェイクジブラスからあぶれた労働者階級や住民登録が出来ない人間が居住したのが始まりだ。ジェイクジブラスへの入許可申請を出した後、処理が完了するのを待つ輸送業者が待機する為に駐在する街として機能し、発展してきた。街から漏れた物資と運搬する違法まがいな物資により経済が成り立っている。あぶれた人間が住むだけにスラムが周辺に展開し、道も舗装している箇所はほぼ無い。脇を通る用水は底が見えないほどに汚れきっている。即興で組み立てた崩れかけた建物は軒並み撤去した上で整地し、クァンターの駐屯地としていた。ジェイクジブラスに比較的近い場所にありながら、無数のマイスを駐屯しておくスペースがない。故に居住している労働者階級やスラムの人間を追い出して取り上げて整地した。土地も住居も失った人々はクァンターの相手をして糊口をしのいでいた。
　ハンスもフローターからラギメトルを降ろし、ルシエラと共に整備をしている。
　汚れきった格好をした男達がラギメトルの元に駆け寄ってきた。集団の中には汚れきった服を着た、乱雑な髪の少女の姿がある。
「手伝いはねえか」男の一人がハンスに話しかけた。
　ルシエラは眉間にシワを寄せ、板バネのテンションの調整をしている手を止めた。
　ハンスはルシエラの前に来た。「俺が行く」男達の元に向かった。男達の集団から
　男達はハンスを見てにやついた。「クァンターさんよ、作業が終わらんのか。手伝ってやれば早く終わっぞ。ついでに遊んでやるってよ」
「悪いが見知らぬ人間と付き合っている暇はない。キャンプ一帯は立入禁止になっているはずだが」
「細かい話は置いとけって」男の一人は笑った。
　ハンスはため息を付き、仕方なくズボンのポケットから財布を取り出して紙幣を出した。「やるからさっさと出ていけ」
　男達はハンスが差し出した紙幣を受け取った。
「帰れと言っているんだ」ハンスは怒号を浴びせた。
　男達は足早に去っていった。
　ルシエラはハンスに近づき、男たちの後姿の先にある、廃墟同然の街並みを見た。駐屯地内部はスラムを強制で召し上げて駐屯地の外に押しやってから土を掘り返して埋め立てため、平たんになっている。外は追いやったがれきの山が出来ている。境には鉄条網付きの柵があり、部外者以外に入れない。元々済んでいた人々が集まり、網にしがみついて中の様子を見ている。
「押し入れに押しって片づけた気なのよ。階級が低くても人がいるのに気づかない」
「移民には人権すらないからな。居住自体が違法だ、場所があるだけお得だよ」ハンスは諦めの気持ちで言った。「上も下も信用できない以上金は稼げるうちに稼いでおくのは自然の流れだ。いちいち文句を言っていたらきりがない」
「でも、何もしないなんて」
「応急のてっぺんに住んでいる女王には、地べた這っている奴のなんて外注にしか見えないさ」
　端末のタイマーが鳴った。依頼者の訓示が流れる時間だ。
　議員の姿が、クァンターの端末から浮かび上がる。「偉大なる同志よ、よくぞサイダ＝ド＝フーに集まった。今より複合体はガルキアの主産業を司る都市、ジェイクジブラスを襲撃せんとしている。非常におごましき行為である」大げさな身振り手振りで演説を始めた。撮影場所は煌びやかな背景からして、サイダ＝ド＝フーではないのは分かる。
　ルシエラは演説を見て不快な表情をした。自らは現場と何も関係ない場所で、複合体と敵対している姿をスポーツを観戦するが如く観戦している。クァンターへの演説は戦意を煽って楽しむための余興でしかない。複合体の現地に飛ぶ姿勢を現状を視察せず、現在の享楽をむさぼる議員に見習ってくれと内心で突き放す。
　議院の自己陶酔な演説が続いている。暑い日差しが次第に傾いていき、昼が近づくに従い暑くなっていく。クァンターや整備士は端末を地面に置いて流れる映像から目を背け、作業を続けている。元より誰も監視していない以上、咎める者は居ない。ルシエラとハンスも降ろしたラギメトルの調整を開始した。
　議院は咳をした。「以上を持って私の話を終わりにする。各員、ガルキアの国家に忠義を見せよ」拍手が鳴り響いた。立っている場所のサクラか議員が拍手をしているのが丸わかりだ。
　若いクァンターが歩いてきた。「ハンス＝アリアントかい」
「いかにもだ」ハンスは軽快に返事をした。
　若いクァンターはラギメトルを見た。「話に聞いたがラギメトルに乗ってるなんてな。ニウテラから戻ってきただけの腕はあるわ」
　ハンスは渋い表情をした。クァンター達の間ではアランと共にニウテラから戻ってきた凄腕のクァンターとして名が通っている。
「ハンスさんの隊にいる人達は安心って奴ですよ」
「お前は」ハンスは若いクァンターに尋ねた。
「俺は別の隊なんですわ。頼みのベテラン、ベンデルクトーク隊も出払ってるんで不安で仕方ないですよ」若いクァンターは笑みを浮かべた。
　ルシエラは若いクァンターと目があった。「用でもあるの」
「大した話じゃないです。複合体の査察が正午にジェイクジブラスに入るって知らせなんで、武装を積んどけって程度の伝言です」
「分かったわ」ルシエラは端末を操作し、ラギメトルの武装リストを確認した。
「※
　暫く経った。整備が終わり、武装の装着が完了した。端末からアラートが鳴り響いた。ジェイクジブラス近辺に査察団が来たのだ。
　ハンスはラギメトルの背部に回り込み、腰部背後の操縦席に乗り込んだ。中に入ると認証用とコア

データ偽装用のカードの２枚をスロットに入れた。腕の筋電位読み取り用のパーツが脇から現れ、腕を挟み込む形で固定した。同様に足の筋電位読み取り用のパーツが足を固定する。クァンターの記憶データや脳波、心拍をチェックしていく。認証が完了し、操縦席に外の光景と各情報が映る。脚部に力を入れ、ラギメトルを起こして輸送機の下に向かった。戦場へフローターを使って輸送するケースは意外に少なく、一般には小隊ごとに輸送機に搭乗し現場に向かう。居住空間であるフローターが破壊してし合えば輸送も整備も不可能になり、発注するにも時間も金もかかる。ハンスはニウテラでフローターを失っている為、尚更身にしみている。輸送機ナルゲムを中心とたマイスで構成した部隊だ。
　ラギメトルは輸送機に向かって歩いていった。ルシエラはラギメトルの姿を見て顔をしかめた。新鋭機といえど、複合体と正面に向かって勝てる訳がない。ハンスも分かっているはずだ。敵とに戦闘をして帰ってくると踏み、フローターに向かった。出迎える準備が必要だ。

　ジェイクジブラスは快晴だった。１年で最も雨量の少ない７月を越え、８月も半ばを越えた。１０階程度の建物が規則正しく並んでいる。端にはターミナルを中心とした外交施設が並び、都市の中央にはオフィスや執政を行う設備が集まっている。住居は地下と地上部に独立して存在しているが、人々は自然の光を求めるのか地上部に住居を設置するケースが圧倒して多い。中心部に近い住居地域には居住用の高層ビルが立ち並んでいる。研究や開発は機密や利便性から地下にある工業エリアにて行っている。元々は巨大な地下空洞を利用して地上と地下に工場を展開してナルオン最大の工業都市となった。ベイソン＝ニモラダにて起きた物体の墜落時は解析を行い、結果を提供し計画の発表を行った。以降は計画の変更により解析技術を封印し、複合体の引き抜きにより大幅に技術力が低下した。ガルキアは軍部より要望の強かった製薬や医療を中心とした都市計画を受け入れた。開発による変更と解析技術の水平移動によりナルオンにおける重大な製薬、医療機械や技術の開発が進み、一つの巨大都市となった。同時に医療の発展はナルオン全体の課題と位置づけ、国家の制約を下げる形で独立した自治を許可した。ジェイクジブラスは国家にある一都市としてより、一つの独立した企業としての面が強い。
　黒を基調とした頑丈な車が大通りの中を進んでいた。自動運転の車の中で２人の少女が後部座席に座っていた。少女達は派手さはないが気品のある服装で、片方は髪を後頭部で結っている。もう一方は帽子をかぶっている。
　帽子をかぶった少女は、髪を結った少女の元に近づいた。「大丈夫なんですか、ルイス様。偽造した個人情報では入れたのはいいんですけど、通用するのは入り口だけです。地下に行くには無理があります」
「大丈夫です、ニケ。次の策はあります」髪を結って変装しているルイスは平然と言った。二人はニケが偽造したＩＤを取り出し、ガルキアの王都ロンジカステルから南西に７００キロメートル離れたジェイクジブラスまで定期便で来た。ルイスに限らず上級階級の人間はデータの形跡で刺客が追跡してくるのを防ぐため、外に出向く時は複数の個人情報を適時書き換えてかく乱する方法をとっている。当然当人の意思で書き換えは出来ないので、ニケが他の役人が公務の際に行っていた書き換え作業を記憶からたどり、同じ方法でアクセスして個人情報を書き換えた。ナルオンの人間は登録した番号と紐づけて他者の識別と所属を決めている。故に書き換えたシステムと登録した当人の情報に矛盾がなければ生体認証ですらも偽装は容易に出来る。但し書き換えは存在する人間を消して架空の別人にする違法行為で、存在を消す必要がある女王以外には不可能となっている。現にニケは近衛兵のままだ。
　ニケはルイスの言葉に疑念を覚えた。思い付きで言う人ではないのは分かっているが、勢いで行動を起こす人間なのもまた確かだ。今回は女王より要人警護の為にジェイクジブラスへ派遣する命令を受けたと、あからさまな偽りの命令を書き込んだので簡単に通ったが、下手なごまかしを繰り返せば、徐々にすり合わせが利かなくなってくる。
「私は軍部の最高責任者でもあります。予め密命としてメーカーの重役に圧力をかけ、査察の為に迎賓館で待ち合わせる約束をしています。話を通した後軍部へのコネが強い議員を紹介してもらい、地下エリアに案内してもらいます」ルイスは得意げに言った。ジェイクジブラスは軍部が都市計画を推進した関係上、軍の関係者が幅を利かせている。町の重役は退役軍人で占め、徹底した機密主義により立ち入りに制限がかかっている。制限なく立ち入りができる人間は都市に籍を持つ住民や研究者、及び成果物である医療器具や薬を大量に使用するお得意先しかいない。代わりに中に入れば軍と同じく、出自を咎める者はなく居住も滞在に自由が利く。故に上級階級からは堅苦しい仕事や付き合いから逃げるため、身分を偽って訪れる避難所として機能している。
「うまく行きますかね」ニケは座席に付いている端末に触れた。メニュー画面が浮かび、立体地図が現れた。現在位置と周辺の位置が映っている。地図に触れた。「迎賓館前へ」表示が変わり、迎賓館までのルートが映った。
　ルイスはルートを確認した。「行きましょう」
　車は大通りから６車線もの車道に入っていった。ブロックごとに脇道が延びていて、６階建てのホテルや迎賓館が広場を介して並んでいるエリアに入った。車は大通りの前で止まった。ドアが開き、二人は降りた。歩行者専用道路が網の目状に敷いてあり、車で移動すると遠回りになる。
　ルイスとニケは貴族階級を相手にする店が並んでいる。ルイスは珍しげに店を見ていたが、ニケが引っ張るために悠長に見ている暇がない。人々は誰一人として女王に気づかず、買い物や雑談に精を出している。
　ニケは周辺に自分に気づいている振りをして襲いかかってくる者が居ないか、腰のナイフに手をかけて警戒していた。記憶から襲ってくる人間のパターンは概ね把握している。人々の波の中から安全なルートを選択し、ルイスを導いて進んで。
　歩行者専用道路を抜け、迎賓館の前に着いた。直方体の白を基調とした建物で、堅牢な門の入り口には警察官が立っている。

ニケは誰も襲ってこなかったのに安堵し、緊張の意図をわずかに緩めて入り口に近づいた。警察官が二人の前に立ちふさがった。
「子供の来る場所ではない。立ち去りなさい」
「すみません、要人を迎賓館まで警護しています。中に入れてもらえませんか」ニケはカードを取り出し、警察官に差し出した。
警察官は大笑いした。「お前みたいなガキが警護してるって何だよ。大人をからかわずに帰るんだ。今はかまっている暇はないんだ」
ニケはルイスの方を向いた。ルイスはうなづき、カードを差し出した。カードを受け取り、自分のカードと共に警察官に差し出した。
警察官はカードを受け取った。ガルキアの紋様を内部に記した半透明のカードだ。「お嬢ちゃん、見てくれのカードでごっこ遊びでもする気か。大人をからかうんじゃない」
ニケは真顔で警察官を見ている。
警察官は端末を取り出して２枚のカードを重ねて読み取った。ルイスの顔写真と共に王族階級の紋とガルキアの女王の署名が入った身分証明が映る。名前の欄には『アイラ＝カーペンター』と書いてある。一方にはニケの顔写真と共に、王族近衛兵のデータが映っている。名前は本名のままだ。顔が青ざめ、ルイスの方を向いた。平然としている。子供と見ていた少女が、自分より遥かに高い地位の近衛兵として王族の警護をしている。疑いがあるがデータはウソをつかない。
「納得出来ないなら金を積んででも通してもらいます。１億ベラが必要ですか」
警察官の顔が強張った。「金で通す程落ちぶれて、いえ失礼しました。王族なら通すまでです。アイラ様、ご案内は必要ですか」ウィンドウを閉じた。
「いえ、何度も通っていますから不要です」ルイスはニケの方を向いた。「女王ルイスが傍らに付く近衛兵もいます」
警察官は端末を操作した。迎賓館の門が開いた。「お通り下さい。先程の無礼をご容赦下さい」
「構いません。悪態がなくば任に忠実と見えます。今まで通り使命を果たしなさい」ルイスとニケは門から先に向かった。
警察官は端末を操作し、門を閉めた。端末を介して通信を入れ、他の部分にいる警察に王族が来たのを通告した。
ルイスとニケは迎賓館の敷地に入った。広場を通り迎賓館の本館に来た。警察官は端末を開き、ニケとルイスを確認した。「アイラ様、警護のニケ様。中にお入り下さい」端末を操作し、ドアを開けた。
二人は中に入った。白を基調とした廊下を通る。ニケは不安げな表情をした。近衛兵として迎賓館を含む主要な施設を通る経験を積んでおり、道順も正確に覚えているが重い空気に緊張を覚える。時に体調を崩す時もある。
奥の間の扉に来た。警備員が立っている。ニケはカードを差し出した。警備員はカードを受け取り、手に持っている端末と重ねた。ニケとアイラの個人データが眼前に映った。
「話は聞いています。お通り下さい」
奥の間が開いた。ニケとルイスは中に入った。
奥の間は鏡面のごとく磨き抜いた床と壁が、ガラス製の窓から差し込む光を反射している。クリーム色を基調としている為、光はなめらかとなっていて眩しさはない。中央のテーブルにヒゲをはやした男が座っていて、脇に険しい表情をした男が立っている。
ニケは険しい表情をした男に既視感を覚えた。記憶からして誰かは容易に推測できるが、声に出す気はない。空気が壊れるからだ。
座っている男が立ち上がり、ルイスに近づいた。「ジェイクジブラス上層の管理をしていますファルク＝ライトです。王族の方が査察で見えると聞き、市長らも歓迎したかったのですがね。複合体から査察があるとの話で官僚が抜けてしまい、ろくに歓迎できず申し訳ありません」男はカードを差し出した。ニケがカードを受け取った。ルイスではなくニケがカードを受け取ったのに不快感を示し、脇にいる男に目をやった。
男はやむなくうなづき、ニケからカードを取り上げるべく手を出した。ニケは素早く手をかわした。次いで胸ぐらに手を伸ばした。
ニケは男の手を引っ張り、もう片方の手で腰に手をかけて膝に足をかけた。男の膝が曲がり、重心が傾いた。同時に男を地面にたたきつける要領で倒した。余りにきれいな流れだった。
アイラは驚いた。突然男がニケに暴行したとしか認識しなかったからだ。
「何をするのですか」ニケはファルクに尋ねた。
ファルクはニケの行動に感心し、手をたたいた。「素晴らしい、近衛兵の肩書を持つだけありますな」
ニケは男から手を離した。
男は起き上がった。「ファルクが貴方に疑念を持っていましてね、なら実証してみろと試したまでです。改めて紹介します。私はトライトン＝ノースと言います。付きとして働いています」
ニケは戸惑いつつ、トライトンと名乗った男と握手をした。
「話にある複合体の査察とは、ニウテラの一件ですか」ルイスはファルクに尋ねた。
ファルクは端末を操作し、ルイスの前にジェイクジブラスの地図を出した。マーカーが市街地の南方にあるターミナルに付いている。
「はい。正午頃に外れのターミナルに到着するとの知らせです。テロや暴動、混乱一環として近辺の市民は別の場所に移動しています」
ルイスは表示しているウィンドウの隣に映る時計を見た。１１時半を示している。「私の方が先に入るのですね」
「入る場所は別ですがね。危険を伴う採掘と都市開発をしている最深層でない限り、任意の場所にご案内しますよ」
「ありがとうございます」ルイスは頭を下げた。

「トライトンが案内する」
　トライトンは頭を下げた。
「早速、地下のメーカーに案内してくれますか」
「無論です」トライトンは明確に答え、ドアに向かった。「まずは地下都市へご案内します」
　ルイスはファルクに頭を下げた。「ありがとうございます」ニケと共にトライトンの元に向かった。
「トライトン」ファルクはトライトンに声をかけた。
　ドアが開く。トライトンは動かない。
「時期が早まったが、望むなら応えろ。頼むぞ」
　トライトンはうなづいた。「地下通路に向かいます」
　トライトンは間から出ていった。ルイスとニケは後をついていった。
　迎賓館から地下への階段を通り、ドアの前に来た。トライトンはドアを開いた。冷気がドアから漏れる。トライトンの後ろにいるルイスとニケは冷気に緊張を覚えた。先には地下通路が見える。
　地下通路は天井に設置したＬＥＤの照明が照らしていて、金属とセメントで固めた通路が更なる冷たさを演出している。
　トライトンは地下通路を進んでいく。ルイスとニケは後をついていく。暫く進んでいくと、突き当りのドアに着いた。
「地下都市のエレベーターですか」
「はい、エレベーターに乗って地下都市に向かいます」
　ニケは拍子抜けした。地下都市に向かうエレベーターとなれば、大掛かりな設備だと予想していたからだ。目の前にあるエレベーターは他の建物にあるエレベーターと変わりはない。「意外に小さいのですね」
「物資搬送のエレベーターなら、迎賓館ほどの面積で最小です。人が、まして要人が行き来するのに膨大な設備は無用です」
「エレベーターの着地点は」ルイスはトライトンに尋ねた。
「企業の迎賓館からなら、ビジターセンターに直でつながっています」
　エレベーターの扉が開いた。トライトンは中に入った。ニケとルイスが後に続いた。
　エレベーターの内部は、王宮やホテルとの違いはない。あるとするなら外が透明なアクリル張りで周囲を鉄骨の網で囲っている点だ。
　ドアが閉まった。エレベーターが下り始めた。ニケとルイスは余りに急だったのでよろけた。鉄骨が上っていくのが見える。
「地下都市は地上より１０００メートルほど地下の空洞内にあります。天井より地下の高さは６００メートル程でして、地下都市に入るのに５分、ビジタールームまで更に５分かかります。
　ルイスは驚いた。地下の空洞内の距離の大きさだけではなく、エレベーターの速度も相当に速い。
　窓から見える光景が地面と鉄骨しか無い景色から、地下都市に変わった。真下には無数の建物が窓から光を放っていて、建物と建物の間を道路が張り巡っている。天井部分からも建物と道路がつり下がっていて、上下が逆さまに入れ替わっても同じに見える。無数の柱が天井から地面に延びていて、空洞を支えている。細い柱は鉄骨で構成しており、周囲にはルイス達が乗っている人員のエレベーターが行き来している。対して太い柱は一見して天井を突き抜ける巨木に見える。内部に物資搬送用のエレベーターを設置し、天井側の都市と下側のの都市とをつなぐエレベーターが外側に付いている構造だ。天井部分の建物や道路がない場所にはハッチがあり、フローターが行き来可能な構造になっている。木々の緑は一切なく、ブロックを積み立てた形状の都市となっている。
　ニケは窓に張り付き、都市の光景を眺めていた。初めての地下都市に興奮を覚えている。
「フォルタジアスと似ていますね」ルイスはトライトンに声をかけた。
「フォルタジアスはジェイクジブラスの都市計画を参考に建築した都市です。自然は曲線を好みますが、人は直線を好む傾向があると聞いています。人工物のみで構成すると、自ずと味気ない直線でまとまった都市になっていくのです」
「でも格好いいですよ」
　ニケの言葉にトライトンは苦笑いをした。
　エレベーターは最下階である地下都市の下側にあるビジターセンターに入った。徐々に速度が落ちていき、停止した。軽くなる感覚があるも、重力制御装置と空気の循環装置のおかげで重篤な異常を起こさずに済んだ。
　ドアが開いた。無機質な廊下が先にあった。
　トライトンは廊下を進んでいった。ニケとルイスは後に続いた。廊下はロビーに出た。通路は吹き抜けを中心に螺旋状になっている。吹き抜けにはホログラフィで地下都市の光景と説明が延々と流れている。製薬会社の説明がメインで、街の構造や観光について触れていない。
　トライトンは通路を降りていく。
　ニケとルイスは地下都市の概要を見ながら、トライトンの後を付いて通路を降りていった。
　通路を抜け、サロンに出た。迎賓館にあった間と異なり、黒みがかった灰色を貴重とした空間で、天井に地上の情報が映っている。壁には自然の映像が映っていて、椅子のないテーブルが置いてある。人はいるにはいるが、話もせずにテーブルに映る立体映像を見ながら紙コップの中に入っている飲み物を飲んでいる。
「サロンです。休憩がてら先に行動について説明します」トライトンは誰も居ないテーブルに向かった。
　ニケは余りに味気ない光景に眉をひそめた。地上から入った客を歓迎する場所としては粗末だ。
「何もないんですね」
「ニケ、失礼です」ルイスはニケを諭し、トライトンのいるテーブルに向かった。
「構いません。物資は貴重ですからね」トライトンはテーブルの中央を軽く突いた。立体映像で飲み物のメニューが出る。真水はなく加工した飲料しかない。地下部で生産出来るのは無機物のみで、発電も地下水による小規模な水力発電のみとなっている為に飾り付けをする余裕はない。豊富に流れる

地下水も硬いので飲料に向かず、工業用に回すのが殆どで飲料に加工する際、匂いが出るので味を付けている。飲み物の一つと個数を入力した。メニューが消え、間もなくテーブルの中央が開いて飲料の入ったコップが３つ出てきた。率先してコップをつかんで中身を飲んだ。安全であるのを証明する必要がある。
　ニケとルイスもトライトンに習い、コップを手に取り中身を飲んだ。消毒液が入っているのか、酸味と苦味の混じった味がする。
　トライトンは机を突いた。立体映像のメニューが現れ、突いた。地下都市の全体図が映った。「地上部が商業や住居、政治を中心としているのに対し地下部分は製造を主軸としたエリアになっています」
　地下都市の図が拡大し、現在地が映る。現在地より地下に入り、研究棟を経てロビーに続くルートの映像が目まぐるしく映った。「今回の査察ですが研究に関する内容の確認を行なった上で、各々のメーカーの重役による説明をし、更に別の製薬所に入ります」
「工場に入れないのですか」ルイスはトライトンに尋ねた。
「ホコリ一つも入れない程の厳しさの上、ほぼ自動で動いていますからね。私と言えど立ち入れば警報が鳴りラインが止まります。２４時間
稼働が前提ですから、不確定要素を入れて止めれば損害が出ますよ」
　ニケはカードを机に置き、データの転送を開始した。カードの上に転送状況が映る。
「貴方が指定したルート以外の場所を見に行きたいと言えば、行けますか」ルイスは一息ついた。
「立ち入りに制限がかかっている都市ですから、機密に関わる場所があるかと存じます。メーカーは軍と関わっていると聞いていますから、尚更調べる必要があります」
　トライトンはうなった。「一般の工場見学レベルでは無理ですが、王族の査察となれば話は別です。むしろ公開しなければ余計な疑念を抱く羽目になり、ロビー活動がやりにくくなります」
　トライトンの返答に、ルイスは疑念を覚えた。最初から公開する気なら今公開すればいい。
　ルイスは立体映像に触れ、製薬会社のビルを突いた。ビルの内部が顕になり、案内を表示する。研究棟の地下はアリの巣状になっていて、他のビルや工場エリアと接続している。工場エリアに触れると、生産している薬品のリストが現れる。聞き慣れていない名称の羅列だ。ニケの方を向いた。ニケはデータの転送状況を見ている。ルイスの方を向いた。「すみません」
「いえ」ルイスは目をそらした。ニケはルイスが見ていた薬品のリストに目をやった。机の上で小刻みに指を動かしながら記憶のライブラリーからデータを引き出す。名前から関連する記憶のデータは存在しないのに気づき、首を振った。いくら記憶力が良くとも、名前の意味が理解できなければ数字の羅列と同じで意味をなさない。
　電子音が鳴った。データの転送が完了したのだ。ニケは机に置いたカードを手にとって胸ポケットからカードホルダーを取り出して中にしまった。
「最初に製薬会社のロビーに行きます。次いで研究棟に向かいます。工場エリアへの立ち入りは不可能との話ですが、説明はしてくれますか」
「構いません。ではメーカーのロビーへ案内願います」
　トライトンは席から奥にあるエスカレーターへと向かった。ニケとルイスは後に続いた。エスカレーターを降り、動く歩道が敷いてある通路を通っていく。立体映像で案内が流れ、同時に壁に広告が映る。カメラから読み込んだ容姿から登録しているデータを照合し、当人に合わせた広告を流すシステムになっている。トライトンは涼しい表情をしているが、ニケ達は慣れておらず不快な表情を見せている。
　地下道を通っていき、メーカーのロビーに来た。扉で区切っておらず、通路から直にフロアの一つとして存在している。人々が行きかっている光景は、一見してターミナルの入り口にも見える。中央にある案内所のカウンターには受付がいて案内をしていて、周囲からエスカレーターがカスケードの如く展開していて、中央の柱にはエレベーターの扉が付いている。
　トライトンは受付に向かった。「トライトンだ。内部の案内人をよこしてくれ」カードを受付に差し出した。
　受付の人はカードを読み取り機の上に置いた。トライトンのデータと査察の要請文書が受付の眼前に映る。「了解しましたが、中に入れません」
　トライトンは眉をひそめた。
　受付の人は机に映るキーボードをたたき、トライトンに状況を見せた。地上のターミナル付近で戦闘が現在進行形で発生していて、地上から地下への避難を開始したとの知らせだ。「特に地上にいる貴族を優先して内部に入れています。貴族とは言え、一般人に変わりないので混ざらないために区域を分ける必要が出てきました。メーカーは閉鎖し、異なる階級のの立ち入りを防ぐ措置を取ります」
　トライトンは避難の状況を見た。広場や一般住居の多い区域に地上からの民を置くシステムになっている。
「各ブロックでの対処の話と、査察で個人を受け入れるのと関係ない」
「確かに仰る通りですが、規則なので従ってもらいます」
　トライトンは端末を取り出し、メニュー画面を開いて地上のファルクに接続を試みた。回線が開かず接続エラーが出る。有事で情報の混乱を防ぐため、地上との通常回線を切っているのだ。懸念していた事態が発生したのを悟った。議員が雇ったクァンターが複合体の査察団と接触し、戦闘になったのだ。「地上に戻るのも出来ないのですか」
「はい」受付の人はトライトンの質問に答えた。
　ニケは天井から映るニュースから地上に異常があるのを読み取った。戦闘が発生している点は直接書いていないが、地上において一部の軍閥が蜂起を行ったと映っている。端末を開き眼前にメニュー画面を開く。使用出来る回線の一覧を開く。公開している回線の接続が切れている。ついで女王の使うホットラインを開く。回線は通常通り接続している。何らかの理由であらゆる回線を切っているのではなく、意図して一般に使う回線を切っていると見ていい。異常事態が発生したのは確かだ。ホットラインから状況を転送した。

「近衛兵、来てくれませんか」
　映す直前、トライトンの声が響いた。
　ニケは端末を胸ポケットにしまい、ルイスと共にトライトンの元に向かった。
　受付の人はニケを疑いの目で見つめた。近衛兵と称しているが子供にしか見えない。ごっこ遊びに大人が付き合っているだけではないか。
「彼女はアイラ様の付きの兵だ。本来は女王の付きだが、代理として同行している」
　ニケは頭を下げた。「ガルキア王家の近衛兵、ニケ＝ローパーです」カードを取り出し、カウンターに置いた。
　受付の人はニケのカードを手に取り、読み取り機に乗せた。ニケの情報が現れる。王家の近衛兵のナンバーが、ガルキアの紋様を背景に現れる。「申し訳ありませんでした」ニケにカードを返した。ニケはカードを受け取った。
「何か問題でもあるのですか」ルイスはトライトンに尋ねた。
「地上で問題があり、地下への避難命令が出ていると知らせがありました。混乱を防ぐため、各メーカーは直ちに閉鎖を行って異なる階級の者を追い出すとの話です」
　ニケは顔をしかめた。問題が発生しているとなれば、情報統制も行っている。ホットラインしか通じない理由だ。
「何故、異なる階級の者を追い出すのですか」ルイスはトライトンに尋ねた。
「治安だ」トライトンは言い切った。共通点を持つ者同士で固まっていれば、暗黙の了解を共有しているのでトラブルは起きにくい。一方で異なる階級の場合は互いに知らぬ文化を持つため、すれ違いが起き犯罪を誘発する要因となる。
「私達も出ていくのですか」ルイスは声を上げた。
「状況が改善してから出直すより他にないです」
　ルイスは眉間にシワを寄せた。今を除いて休みを取る機会はなく、お受けの人間が査察に来ていたと分かればメーカーは警戒して資料を破棄にかかる可能性もある。
「撤退しないと追い出しを喰らいますか」ニケはトライトンに尋ねた。
「ガルキアにいるなら分かろう」
　ニケはうなった。ガルキアは徹底した階級制を取っている。階級の役割を超えた対処をすれば、警察を含めた組織はいかなる手段を持ってしても正しにかかる。王族と言えど例外ではない。保護の名目で警察が引き剥がしにかかる。
「我々の目的は機密の領域への査察だ。普段立ち入れない場所、例えば最深部となれば警察も立ち入りは出来まい。至急最深部への立ち入り許可を頼む」
　受付の人はトライトンの要求に眉をひそめた。確かに領域に立ち入れば警察も入り込めず、査察への介入は不可能になる。かといって安易に許可を出す訳に行かない。「無理です。王族となれば万が一の事態になった場合の保証が出来ません。然るべき場所に保護をする必要があります」
「複合体から疑いが出ている以上、隠しても表に出るのは時間の問題だ。ならば複合体が介入する前に王族に知らせた上で対応を協議してもらった方が得策だと認識出来ないのかね」
　ルイスはうなづいた。「私達は貴方達、製薬メーカーを守るために来ているのです。情報を知らないままでは養護できません。複合体に渡って圧力がかかった挙げ句、潰れてもいいのですか」ルイスは受付に食って掛かった。
　受付の人はルイスの手を払った。ルイス達が中等学校の子供と引率している教師にしか見えない。
「話を付けます」受付の人は適当に言い、キーボードに手を伸ばした。
「回線をつなぐ意味はない」トライトンは胸ポケットからカードを取り出した。複合体が査察に来ている以上、隠し通すのに無理がある。「私の権限でエリアに入れる。全コードを入れてくれ」カウンターにカードを置いた。
　受付の人はトライトンの突然の行動に疑念を懐いだ。「何を根拠に権限と言っているのですか。貴方は所詮、重役付きの使用人です。権限など」
「読み込んでから言え」トライトンは声を上げた。
　受付の人はカードをカード読み取り機の上に置いた。身分がカードの上に映る。目の色が変わった。
　ニケは受付の人の表情から、映っている内容を確認するべくのぞき込んだ。間仕切りがあって見えない。個人情報を外から見えなくするための措置だ。
「全コードを解除するのですか。軍や役員の承認が必要です」
「承知済みだ。でなけれ査察に同行しない」
　受付の人はキーボードを打ち込んだ。深層部を含むキーを解除する鍵をカードにインプットしていく。状況を示すダイアログが映った。しばらくして完了した。カードを読み取り機から取り出してトライトンに差し出した。「お気をつけて」
　トライトンはカードを受け取り、ニケとルイスの方を向いた。「査察を再開します。何者であっても咎めはしませんからご安心下さい」
「目的地は」ニケはトライトンに尋ねた。
　トライトンは端末を取り出し、操作した。製薬メーカーのビルが並ぶ立体地図が浮かび上がり、各製薬メーカーのビルの下に地下通路が映る。地下通路は枝分かれしつつも次第に最下層にある一つのスペースに統一している。『地下避難区物資確保エリア　食料及び物資の保持の為関係者以外立入不可。無許可立入の場合自動で排除する』と書いてある。「最下層に向かいます」
「避難区域に向かっても何も意味はないのですが」
「強固なキュリティを持っている理由が分かりますよ」トライトンは端末を操作した。立体地図が消えた。「案内します」ロビーからエレベーターに向かった。
　ニケは疑念を覚えたが、地上に戻るのも叶わない以上、他に選択肢はない。ルイスの方を向いた。ルイスはうなづいた。
　ニケとルイスはトライトンの後をついていった。

　アランのフローターはフォルタジアスに向けて上空を移動していた。周囲に雲が広がっていて、地上が見えにくくなっている。
　フローター内のサロンでは、アリスとテレス、アランの３人がテーブルに座っていた。テーブル上にはジェイクジブラスに関するデータが映像やウィンドウが無数に並べてあり、盲目のアリスが聞き取る為に音声が流れている。
　アランはデータの一部を眺めた。複合体が派遣した査察団に関する内容だ。査察団のリストに素人や科学者の肩書は一切無い。クァンターと乗機に関する内容のみだ。
「偽装か」アランは声を漏らした。クァンターにも知識を持つ者はいるが、査察ならクァンターよりルガージ＝セイロにいたメア博士を含めた専門家を呼んだ方が穏便に済むし成果も手に入りやすい。査察を偽装した武装集団をジェイクジブラスに派遣し、相手の反応を見る気か。
「奴らが仕掛けてきた場合、即座に排除し内部に強行する。仕掛けてこないなら先行した護衛部隊を派遣したと言い訳をして本物の査察団を派遣する。用心する必要があるので慎重策を取ったに過ぎん」アリスは言い切った。査察団を装いマイスを搭載したフローターを複数派遣したのである。当然表向きには査察団なので攻撃をすれば外交問題になる。しかしガルキアは自治権を盾に攻撃の意思を見せる可能性がある。念を入れた策だ。
　アランはジェイクジブラスの地上部の立体地図を映した。南方と北方のターミナル近辺に高層ビルが建ち並んでいて、中央にある政治中枢施設と企業の本社ビル群から四方八方に広場が広がっている。
「戦闘になったら、周辺は廃墟になって、死体の山が雑草よりも転がるぞ。余計な戦火を上げればガルキアが抗議してますますカードを出さなくなる」
「最もですが、ガルキアが仕掛けなければ査察は滞りなく進みます。仮に仕掛ける場合、予め計画を立てているのですから避難を行っていると予想出来ます」
　アランは渋い表情をした。
　アリスはため息をついた。「平時においては民間人の命は重く、兵士の命は軽い。有事となれば逆に命の価値は逆転する。戦場において民間人など、カーペットにまとわりつく毛程の価値すら無い」
　アランはうなった。闘争の中に身を置いているクァンターである以上、アリスの言葉は正論だと分かる。クァンターや兵士は育てるにあたって相当な金を時間がかかる。戦場で失えば損害に直結し、士気に影響する。消耗品として扱うにしても値段相応の価値は存在するのだ。
　ウィンドウが開いた。ジェイクジブラスに関する情報だ。上空から撮影した、マイスが都市部で入り混じった写真が映る。中心になっているのはナルゲムだ。ガルキアがフリーのクァンターを雇い査察団のフローターを攻撃したと予測できる。
　次々と情報が映っては更新していく。ジェイクジブラスがマイスの抗争の舞台となり、地図に選挙区の情報がダイレクトに重なって現れる。戦火は拡大し街の中央部まで迫っていく。
「何が起きた」アリスはテレスとアランに尋ねた。
「アンタの予想通りだ。ガルキアがフリーのクァンターを雇って査察団を攻撃したらしくてな、ターミナルから戦火が広がっている。ガルキアの主産業都市を火の海にして何が楽しいんだかね」
　テレスは机を突いた。音声が流れ、アリスの耳に入っていく。アランは黙った。耳から入る情報に余計な言葉を足さない為だ。
　アリスは音声を一通り聞き終えた。
「アラン、お前の気持ちも分かるが複合体が出ればマッチポンプになってしまう。スプレアもガルキアの領内であるが為に内政干渉とみなして入らない。となればガルキア自身が動くしか無い。とはいえ、肝心のガルキアが戦闘しているとなれば動かない。都市の自治権を盾にしているなら民の安全を優先するべきだが、奴らは軍の体裁を優先したと見える」
「国民の命を切り捨てるとは、ひどい奴らだ。で、査察団を装った奴らは自衛を目的に戦闘しているんじゃないだろ。何が目的だ」
　アリスはうなづいた。「アクセス不能になっている情報を抜き取り、回収する。奴らがニウテラを占拠した真の理由と、つながっていると見ている不明のマイスに関する情報が眠っているやもしれん」
「ならロンジカステルにでも攻めればよかったのにな」
　アリスはアランの言葉に笑った。「尋問するのに頭を砕く奴がいるか。手足をそいで脅しつけるからこそ、価値がある戦術だぞ」
　アランは渋い表情をした。あるかないか関係なしに地下に向かい、情報を引き出す気なのか。
　緊急の連絡が入ってきた。ガルキアの貴族が複合体に使う直通回線だ。テレスは回線を開く。
　ウィンドウが開いた。ガルキアの紋様が入っており、複合体への宛先と共にメッセージが映る。複合体を通してクァンターに依頼をかける要請だ。
　アランはメッセージを呼んで眉をひそめた。依頼の内容は女王が隔離状態となり地下にこもってしまったので救出を求める内容だ。自分達で引き起こしたにも関わらず、重大な人物を避難せず地下に閉じ込めるとは間が抜けている。
　テレスは次々に添付しているデータを展開していく。女王が偽装したＩＤのデータや近衛兵のデータ、地下の立体地図と共に地下へのポートを開ける為に必要な電子キーの情報が現れていく。
「何を受け取った」アリスは二人に尋ねた。
「ガルキアの製薬メーカーより複合体に回した依頼です。女王が地下に隔離状態となったため、救出しろとの内容です」
「信用できないな。おびき出して大将を落とすなんてのがあるかも知れない」
「ありえません」テレスはアランの言葉を否定した。「女王と近衛兵のデータから、ジェイクジブラスにいるのは確実です」

「何でまた、火薬庫に足突っ込んだんかね」アランは呆れた。
「お前の仕事と同じだよ、分かっていても必要があればやる。女王でも仕事でやるのなら分かっていてもやらねばならないのだよ」
「仕方ねえな、依頼報酬は」アランはテレスに尋ねた。
　テレスは机に浮かぶキーボードをたたいた。依頼報酬の詳細を示すウィンドウが開く。
　アランは依頼報酬の内容を見て眉をひそめた。「前金でインゴット１０万、報酬で５０万か。ガルキア通貨換算だと４、５０００万だっけか。平均より高いレベルか」
「今は多少低いです。治安が安定しているのでインゴットの値が下がっています」
「表向きだろ」
「くだらん話はいい」アリスはアランの方を向いた。「やるか」
　アランはアリスの言葉に眉をひそめた。「曲がりなりにも護送中ですが」
「複合体の議員、まして神の棺計画の主権を持つ委員会の人間からの誘いだぞ。護送中の権限など今すぐにでも消してやる。ホテルに引きこもるだけのペットまがいな生活とさようなら出来るし金も入る。悪くない話だぞ」
「金は遺族も死ぬまで遊べる程に持ってる。金一つで動く安いクァンターじゃないんでな」
「私が色目を付けてやったからだ。貧困で死ねば神の棺計画へのトレーニングにもならん」
　アランはため息をついた。「グルパスで出るか」
「やめろ」アリスは鋭い口調で言った。「ラギメトルで出ろ。グルパスを壊せば例の兵器が特異点に使えなくなるからな。ついでに言っておくが、可能な限り戦闘は避けろ。地下に入り女王を救出して離脱すればいい。無駄に損傷して行動に支障をきたす真似はするな」
　テレスはキーボードを打ち込み、データを入れていく。「マイスに入れるカードを出して下さい」
「ダイレクトで通信は」
「ジェイクジブラスは戦闘中ですが」
　アランは仕方なく胸ポケットからマイスに入れるカードを出した。マイスは強力な量子通信を行っているとは言え、戦闘に耐えうる程の防御障壁が発生すれば支障が出る。フローターから随時指示を出すのは無理に近い。
　テレスはカードにデータを転送し始めた。「地下に向かう輸送ポートの場所とパスです」
「地上は敵だらけなのは分かるが、地下は」
「依頼人は何も伝えていません。地下への侵略まで想定してないのかも知れません」テレスはアランの腕輪に触れた。「腕輪を」
「外すのか」アランは両手をテレスに突き出した。
「貴方の罪が消えない以上外せませんが、取引で止めるのは委員会の判断で可能です」テレスは机に置いてある端末を手に取り、アランの腕輪に重ねた。腕輪から放つ電子の光が消えて外れた。
「逃げるかも知れないぞ」
「クァンターは信頼が基本だ。私の顔に泥でも塗りたくるか」
　テレスはカードを差し出した。「データの移行、完了しました」
　アランはカードを受け取り、足早にサロンを後にした。
「グルパスが改造していなければ、潰すいい機会でしたのにね」
　アリスは一瞬、眉間にシワを寄せた。「私どころか自分すらも偽りマイスに乗っていたのだ。遅かれ早かれ去る運命にあった。セドリックもまた、私の婚約者を殺した罪を勝手にかぶり実力を生かせずに去った。自分を偽り行き続ければ必ず自分に帰ってくる。アランには自分の目的に正直に生きろと教えていた。今、素直に実行している。血のつながりはなくとも、親孝行な息子だよ」
　アリスの言葉に、テレスの表情が緩んだ。
　アランは格納庫に向かい、ラギメトルとグルパスを交互に見比べた。共に膝を立ててかがみ込んだ状態で鈍い光を放ち、フローターにエネルギーを与えている。グルパスは武装を取り外しており、背部ユニットはラギメトルに移し替えてある。台座にはクロスボウが転がっている。ラギメトルには飛び道具はあるがマイスの防御障壁を貫通する程の性能はない。ジェイクジブラスでの戦闘は避けろと命令を受けたが、戦場となっている以上複数のマイスとの戦闘は避けて通るのは不可能だ。ラギメトルの腰部背後にある操縦席に向かい、端末を操作した。操縦席が開き、座席がせり出してきた。座席に飛び乗り、端末を手元の空いているスロットに差し込んで操作した。操縦席は座席を飲む形で移動し、格納した。カードを取り出し、テレスからもらったカードと認証用のカードを別々のスロットに入れた。腕と足を筋電位を読み込むカバーが覆い、頭部にもカバーがかぶさった。同時にウィンドウに脳波と記憶の認証を行う。マイスは自身にマスクしてある潜在の記憶とクァンターの潜在の記憶を照合して認証を行うと同時に、クァンターの癖になじみ意図通りの動きを可能とする。通常、クァンターの記憶はマスクしてある記憶と異なるためダミーの記憶を入れたカードを使って認証するが、アランはダミーカードを使う必要はない。記憶が素で認証できるため、いかなるマイスをも意思通り操作できる。理由は当人にも分からないが、知る気もないし知りたくもない。
　認証が完了し、各部位のエネルギーとメンテナンス状態が現れ次々とクリアしていく。カメラからの映像と情報が映った。
　テレスに通信を入れる。「脱出後、落ち合う場所は」
　立体地図が映り、スプレア領との境に点が付いた。「ガルキアの国境付近で留めておくわ」
「了解だ」アランは足に力を入れた。
　ラギメトルと台座をつなぐタガが外れた。ラギメトルは立ち上がり、補助腕を伸ばしてクロスボウを掴んで背中に格納する。
　補助腕を介してクロスボウに内蔵したデータを読み込み、火器制御プログラムをインストールした。
　アランは武装を確認した。次々に武装と装備箇所が映る。確認を終え、目をそらした。画面が閉じた。
　フローターの上部が開いた。上空は晴れている。ラギメトルは瞬時にフローターから空中に転移する。フローラルデバイスよりベージュに近い朱の光を放ちながら、ジェイクジブラスに向かって転移

を繰り返していく。
　フローターは上部を閉じ、ラギメトルが向かった先と逆方向に旋回した。

　ジェイクジブラスの街は戦場となっていた。マイスは道路を移動しながら破損した高層ビルを盾に相手の状況を伺い、遭遇した敵と交戦していった。一方は防衛を目的として迫る者の排除を行い、一方は攻撃への報復と自衛のために他のマイスに向けて戦闘を行う。戦火は街の端にあるターミナルから中央へ広がっていき、建物は壊れて道路は寸断していく。
　ハンスは次々に映る情報を確認しつつ、現在地と相手側の状況とを照らし合わせた。攻撃したフローターは４機を確認している。クァンターのフローター１機あたりに格納しているマイスを最大の５機と見積もった場合、２０機程が出ている勘定になる。実際には１方向以外にも飛来している可能性があるので交戦した部隊全体ではないのは確実だが、護衛として見れば数として過剰と言えるまでに多い。議院の目論見通り、複合体は最初から力づくで攻める気だったのだ。
　遠方から反応がある。マイスが崩れてガレキに成り果てた建物と道路を踏みしめる。転移を繰り返しナルゲムが現れた。周辺にマイスはいない。空いた場所に転移してきたのだ。
　ハンスのラギメトルはスピアの柄を短く持ち、もう片方に小型剣を握っている。ナルゲムの転移に築くと即座に側面に回り込み、同時にスピアを胸部へ突き出した。
　ナルゲムは片手に持っている小型剣でスピアの先端を弾き、もう片方に持っているスピアを大きく振り上げ、ラギメトルを切り上げる。
　ラギメトルは下がってかわし、ナルゲムは追撃をするべく大きく踏み込んでスピアを引く。ナルゲムの動きを察知し、背部ユニットを回して前面に出す。
　ナルゲムはラギメトルの横に回り込み、突き繰り出す。ラギメトルの背部ユニットに搭載している紅玉状の装置から防御障壁が多重に発生する。防御衝撃はスピアを阻止した。ナルゲムは予想外の状況に止まった。
　ラギメトルはナルゲムが止まった隙を付き、スピアで胸部を突き刺す。スピアはナルゲムの胸部を貫通した。
　ナルゲムのフローラルデバイスが放つ光が弱まっていく。スピアを抜いた。ナルゲムは機能を停止し、うつ伏せに倒れた。地面に衝撃が走り、コンクリートのホコリが舞い散る。フローラルデバイスの光が消え、動かぬ機械の塊となっ
た。
　ハンスは戦闘を終えて冷静さを取り戻していく。周辺の状況を確認する。現在地はターミナルより離れた市街地で、徐々に中央へ移動しつつある。防衛側が不利になっているのだ。新たな反応がジェイクジブラスより離れた場所から高速で近づいているのを確認した。新たな刺客が現れたと認識した。
　ハンスのラギメトルは方向を転換し、広場に向かって転移を繰り返した。周辺はマイスの戦闘が行われているが、転移を駆使して回避していった。
　アランのラギメトルは上空より転移を繰り返し、地図上から着地位置を決めて降下していく。廃墟と化してマイスが行きかう地上が近づいていく。同時に背部ユニットを展開し電導刃を抜き取る。広場に高速で着地した。周囲に衝撃が響き、交戦していたマイス達は一斉に動きを止めた。土ボコりが舞い散る。
　アランは着地した場所の状況を確認し、ポートのある場所を探した。広場から６キロメートル程中央区域に近い場所にあるのを地図上で確認した。
　アランのラギメトルはかがんだ状態から起き上がった。フローラルデバイスの光が更に強まり、朱色の輝きを放つ。マイス達には双方の識別コードの確認がない機体として認識した。文字通りの部外者だ。ポートの方向を見定め、即座に転移を開始した。
　周辺のナルゲムの部隊は、アランのラギメトルに向けて襲撃を開始した。防衛側についているフリーのクァンターは即座にアランのラギメトルを敵とみなした。
　アランのラギメトルは即座にクロスボウを補助腕を介して展開し、立ちふさがるマイスの胸部へ発射した。光をまとう弾頭は間に妨害する関門もなく、マイスの胸部と頭部刺さる。刺さったマイスは機能を停止して立ったまま動きを止めた。
　アランのラギメトルは、障害の一つを排除し、先へと転移して進んでいく。マイスは追跡をかけるも、複合体と契約したマイスが道を阻んだ。敵といえど目的が一致しているなら鉄砲玉として放置する方が得策だと判断したのだ。互いのマイスは眼前の敵の排除へと目的を変え、交戦を始める。
　アランのラギメトルは道路をたどって進んでいく。立ちふさがる建物のがれきはバルカン砲で取り除き、立ちふさがるマイスは即座に間合いを詰めて電導刃で切り裂いていく。
　アランは市街の状況を確認した。近づいてくるマイスの反応が減っている。恐れをなしてこなくなったのだ。町の人々もほとんどなく、元より地下にも都市があるので非難は容易ではある。自分の前に反応が発生したのに気付いた。明らかに自分に向けて転移してきている。自信があるのか、排除を至上の任としたサッカーのゴールキーパーの如き存在なのか。今の状況で挑むとなれば手足れなのは確かだと判断した。上空に反応が現れた。現在位置より物体が近い程にレーダーの性能が上がり立体で読み取った情報を精査可能になる。
　アランは上空に警戒した。直後、上空から無数のグレネード弾が降ってきた。
　マイスは防御衝撃により、いかなる爆風でもダメージを与えるなど不可能だが、ばらまく意図はある。ラギメトルの眼前でグレネードが次々と爆発する。爆風により地面の粉塵が巻き起こり、グレネード弾の内部に入っている白い粉が更に視界を遮る。煙幕を張るのが目的だ。
　アランの操縦席に映る光景が真っ白になっている。即座に周辺の立体物をソナー反射の原理で識別し、赤い輪郭で投影する。
　ラギメトルは移動し、背を建物に付けた。マイスを倒すには近接戦闘に持ち込む必要がある。確実

に不意を付くとするなら背後だ。少なくとも、死角になる背部さえカバーしておけば粉塵の動きから相手の位置を視界で特定しやすくなる。
　背部から反応があった。アランは顔をしかめ、足に力を入れた。予想が外れたと気づいた。
　ラギメトルは即座に建物から離れ、橋の上に転移した。
　直後に重低音が響き、建物の真ん中からスピアが突き出てきた。相手は建物ごと貫く気だったのだ。
　相手は感触がないのに気づき、スピアを抜くが抜けない。ビルの自重で挟まったのだ。やむなくスピアを抜かず、手を離した。
　ラギメトルは即座に煙幕から抜けた。煙幕から抜けた所を狙ってくるのかと踏み、建物を背に潜伏して様子を見ていた。相手は自分の行動を予測し、煙幕の中に入り迷わず攻撃してきた。経験が豊富なクァンターだ。
　アランは即座に自分がいた建物を見た。背部ユニットを搭載した、フローラルデバイスから青い光を放つラギメトルが立っている。機体の照合の結果、所有しているクァンターと関連するデータが現れる。ハンスのラギメトルだ。
　ハンスのラギメトルはスピアのケーブルを切り離し、背部ユニットから電導刃を抜いた。刀身のフローラルデバイスにエネルギーが発生し、白い光を発する。建物から回り込み、アランのラギメトルを視界に捉えた。
　ハンスもアランのラギメトルを解析し、認識した。厄介な奴が敵になって現れるとは割に合わない仕事だ。
　アランは顔をしかめた。同型のマイスとなれば、有利な状態に持ち込んだ上で撃破するのが定石だ。
　ハンスのラギメトルはアランのラギメトルと同じ橋の上に乗り、歩いて間合いを詰めてくる。転移を行いつつ近づくのが得策だが、移動範囲の予測データから転移する位置とタイミングを読まれ不意打ちを受ける危険がある。先に戦闘行動を起こした側が不利になるのだ。
　アランのラギメトルは背中の補助腕を回し、バルカン砲を腰に回してハンスのラギメトルに向けて発射する。バルカン砲はエネルギーの細切れを撃ち出し、ハンスのラギメトルの足元に向けて絶え間なく発射する。足元がバルカンの弾丸で切断し、アスファルトのホコリを上げて崩れていく。橋の上なので足元が崩れれば周辺は下の川に落ちる。当然、足元にいるハンスのラギメトルも例外ではない。
　ハンスのラギメトルはフローラルデバイスにより空間を固定して落下を防いだ。足元は絶え間なく放つバルカンの弾丸で壊れ、崩れて川に落ちた。川からは音と共に飛沫が飛ぶ。
　直後にアランのラギメトルはハンスのラギメトルの元へと転移し、電導刃で横になぐ。足元を撃って足場を崩したのは不意を作るためだ。
　ハンスのラギメトルは即座に背部ユニットをアランのラギメトルのいる方に動かし、多重に防御障壁を展開して電導刃を受け止めた。防御障壁諸共裁断する電導刃といえど、多重に展開する防御障壁を切断するには刀身を破損しかねない程のエネルギーを一点に集める必要があるが、刀身にまんべんなくエネルギーを伝達する構造上、不可能に近い。盾は剣に対応して開発するが故、防御性能を上回っているのだ。
　アランのラギメトルは脚部の打突機を展開し、階段に足をかける要領で防御障壁に足をかけ、もう片方の足を地面から離した。大抵の防御障壁は貫通するが、多重の防御障壁を展開する背部ユニットを貫くのは無理だ。直後に打突機が作動し、衝撃が周囲に広がっていく。打突機で防御障壁自体は貫けないが、位置をそらすまでは出来る。打突機も空間の固定により発生する防御障壁に干渉している以上、衝撃の影響を与えるのは可能だ。
　ハンスのラギメトルは衝撃で体が傾き、背部ユニットがそれた。同時にアランのラギメトルはラギメトルを蹴って間合いを離す。
　アランは背部ユニットの状態を見逃さなかった。盾は他の武器を容易に弾く防御力を誇るが、有効なのは正面からの攻撃に対してのみだ。接続している補助腕の部分は可動の関係から防御障壁が薄くなる。衝撃でそらし、接続部をむき出しにしたのだ。クロスボウをセットし、補助腕の部分を捉える。
　アランのラギメトルは、クロスボウを接続する補助腕を展開して接続部に向けた。弾頭にエネルギーがたまり光を発する。射程はほぼ至近距離なので距離によるチャージの係数を気にする必要はない。当たればいいのだ。クロスボウを補助腕に向かって発射する。クロスボウは補助腕の関節部にあたり、容易に分断する。無理にこじ開けたので急所に当てる余裕はなかったが、指を折り損害を与えたのに変わりはない。ハンスのラギメトルは電導刃で払うも、離脱するアランのラギメトルの脚部をかすっただけで空を切った。アランのラギメトルは切断した橋の先へ転移して着地した。
　ハンスのラギメトルから背部ユニットが外れて落ちた。直後にバランスを崩すも、立て直した。
　ハンスは焦りを覚えた。同じ機体と装備なら手札が少ない方が不利だ。着実に札を切りにかかっている。
　アランのラギメトルは後退しつつクロスボウをハンスのラギメトルに向け、セットしているだけの弾を発射した。背部ユニットの死角の部分を狙っていく。ハンスのラギメトルは転移を行い回避しつつ、間合いを詰めて電導刃で突き刺しにかかる。
　アランのラギメトルは背部ユニットを前面に出し、防御障壁を重複して展開して防ぐ。ハンスのラギメトルが行ったのと同じ手だ。電導刃を弾き、軌道がそれた。
　ハンスのラギメトルは即座に反撃が来ると踏み、転移して後退した。アランのラギメトルは反撃に移るにもハンスの判断が早かったために反撃の体勢のまま、背部ユニットを後ろに回し電導刃を青眼に構える。
　アランはハンスのラギメトルを見据えている。片方とは言え、防御用の背部ユニットを切り離した以上、死角が発生する。しかしながら相手も死角を確実に突いてくるのは分かっているので意識はする。ハンス程の天才がやすやすと急所をさらすなどあり得ない。いかにして意識を外し、当てていくかが重要だ。息を呑み、前に体重をかける。
　アランのラギメトルは転移を繰り返してハンスのラギメトルに向けて蛇行しながら進んでいく。一方でハンスのラギメトルは相手に対して斜めの位置に構え、前方に背部ユニットを出して展開すると同時に、電導刃を持つ腕を垂れ下がる形で持つ。背部ユニットで防御をし、直後に切り払う戦法だ。

正面から挑む限り、死角はない。腰を下げて衝撃に備える。
　アランのラギメトルはハンスのラギメトルの元に転移し、飛び上がった。両手持ちの構えで一気に両断する気だ。
　ハンスは笑みを浮かべた。自分の読み通りだ。
　アランは表示しているウィンドウの一つに目をやった。腰にセットしてある照明弾の数を確認する。
　アランのラギメトルの腰部にある、照明弾のランチャーが周りハンスのラギメトルを捉える。直後に照明弾を溜め込んでいるだけ発射した。照明弾はハンスのラギメトルの防御障壁に当たり、弾いて炸裂し光と音を発する。
　ハンスは眼前で発生した光と音に驚いた。想定外の行動と爆音とカメラを幻惑する程の光に一瞬怯み、体重を後ろにかける。
　ハンスのラギメトルは一気に後退する。アランのラギメトルが唐竹に斬りつけた電導刃は防御障壁の残像に当たって切断するも、実態ではないので空を切る。即座に予備のスピアを補助腕を介して装備し、アランのラギメトルに向けて投げつけた。スピアの柄の部分にはエネルギーを供給するためのケーブルが付いており、ケーブルが有線ミサイルのワイヤーの如く尾を引いている。先端はエネルギーが集中して光を発している。当たれば防御障壁を貫通する。
　アランのラギメトルは投げつけたスピアを転移して回避した。スピアは残像を貫通し、地面に落ちて鈍い音とホコリを振動と共に放つ。
　ハンスのラギメトルは電導刃を構えた。間合いを更に離す選択はほぼ取らず、一度に詰めて目の前に転移してとどめを刺すと推測する。転移できる距離はほぼ決まっているので、位置も把握できる。
　アランのラギメトルはハンスのラギメトルの前に転移してきた。片手に電導刃を持っている。逆袈裟になぎ払う気だ。ハンスの予想通りだ。
　ハンスのラギメトルはアランのラギメトルから先手を取り、電導刃を真横になぎ払う。
　アランのラギメトルに付いている背部ユニットは攻撃に移行している為に背部に回っている。防御は出来ない。体をひねって腕で受け止めて勢いをそらし、胸部へのダメージを軽減する。ハンスのラギメトルがないだ電導刃は、電導刃を持つ側の腕と肩を切断した上で斜め上へとそれた。
　アランは切断した部位が軽くなったのを覚えた。切断を即座に察しながらもひるまず、接続している側の拳を握りしめ力を入れた。
　アランのラギメトルの腕が正拳突きの容量で突き出す。手甲部分がせり出し、エネルギー発生装置が展開して光を放つ。スタークフィストだ。ハンスのラギメトルの防御障壁を貫き、腹部を殴る。
　ハンスのラギメトルは衝撃でゆがんだ。
　アランのラギメトルの、腹部を殴った拳にエネルギーが更に集まっていく。
　アランはスタークフィストに溜まったエネルギーの出力が限界に達したのを確認した。一気に放てば腕と共に吹き飛ばす。
　ハンスは操縦席に映る状況から、事態を把握した。なぎはらう剣の動きに対し、拳の突く軌道は最短で目標に到達する。武器に頼った自分の敗北だ。
　アランのラギメトルの拳からエネルギーを開放する。衝撃と共に、ハンスのラギメトルの上半身が吹き飛んだ。当然、アランのラギメトルの肘から先の部分も吹き飛ぶ。衝撃と共に周辺区域に衝撃を放つ。衝撃が消えた時、ハンスのラギメトルの下半身が倒れた。肩から先の片腕と、もう片方の肘から先を失ったアランのラギメトルだけが立っている。
　一歩を踏み込んだ。バランスが悪く崩れかけたが、背部ユニットをバランサーとして調整してあるき出した。
　アランは周辺の状況を確認した。マイスが近づく気配はなく、地下に向かうポートまで２キロ半になる。
　アランのラギメトルはポートの方向へ旋回し、垂直に浮かび上がって転移を繰り返した。
　ポートのある場所に来た。周辺一帯は広場となっている。ポートは物資の行き来を行う関係から、一般に立ち入りが制限した場所に設置してある。
　ラギメトルはポートの上に浮かぶ形で乗り、腰部に搭載しているワイヤー付きのセンサーを飛ばしてポートの接続部に差し込んだ。
　アランの眼前にポートの認証コードが浮かぶ。１６進数で１億桁ものコードを一定時間内に打ち込まないと開かない仕組みになっている。しかもコードは一定の法則で常に変動するため、変動表を参照した上で次のコードを予測して打つ必要がある。
　アランは出撃する前にテレスからコードをもらっているため、問題なく自動で打ち込みを行う。
　周辺を警戒し、マイスが来るのを警戒する。今になって転移してきても、既に認証をしているために開くのは確定済みで問題はない。戦闘にしても手負いではあるが補助腕による戦闘は可能で、電導刃も抜いていない予備が１本あり背部ユニットも２基とも健在なので腕でカバーできる。離脱についてもラギメトルと他の現行のマイスではフローラルデバイスの出力が桁違いなので問題なく行える。
　コードの認証が解除し、ポートのハッチが開いた。奥にあるハッチが次々と開く。
　ラギメトルは開いたポートの中に入り、地下都市へと向かって転移を繰り返して移動する。ポート内のハッチが次々と開いていき、降下していく。
　５分ほど経過した。最後のハッチが開き、空洞に入った。地下都市が眼下に広がる。天井にも建物や道路が吊り下がっていて、至る場所に柱がある。他のポートが開いておらず、地上のマイスはラギメトルを除き入っていない。
　ポートのハッチが閉じていった。他のマイスは入って来ない。
　アランは周辺を見回す。侵略した形跡はない。既に侵略を受けていれば保護の必要はある。実際には侵略の形跡も、外から入ってきたマイスも存在しない。避難しているなら、素直に終わるまで放置すればいいはずだ。地上部の状況を見て、地下へ侵略するのも時間の問題だと焦り、早めに依頼を出したのだと判断した。即座にフローラルデバイスの出力を下げてスキャンし、防衛隊の動きと女王の位置を読み取る。外部の情報を読み取るには防御障壁が邪魔になるからだ。遠方の駐屯地からマイスが出撃したのを確認した。正規兵のモカラだ。振り切るのは容易だが、女王のいる場所はメーカーの

本部内の地下だと分かっている以上、目的地に向かわねばならず、逃げる選択肢はない。大抵の球技と同じく、戦闘は攻める側より守りに入る側が強い。交戦を避けるのは不可能だと判断し、補助腕で背部ユニットから電導刃を抜いた。フローラルデバイスの出力を上げ、目的地まで転移を行う。直後にモカラの部隊がラギメトルを追跡する。
　モカラの一機がラギメトルに向けてバルカン砲を撃ち込む。当然防御障壁により弾く。ダメージはない。
　アランは追跡してくる２機のモカラを確認した。交戦すれば破片やエネルギー弾が飛び交い、人々に被害が及ぶ。避難している人が地下都市にいる以上、うかつに交戦する気はない。空中で止まった。
　モカラが近づき、ラギメトルの肩に触れた。
『貴様、何をしている』モカラのクァンターから通信が入った。『無所属のクァンターか、用がないなら大人しく投降しろ』
「メーカーに用がある。でなければ地下に来ない。離してくれ、交戦する気はない。」アランは顔をしかめ、手足に力を入れた。交渉など通じるわけがない。隙をついて離脱し、目的地に到達する策を頭の中で練っている。
『メーカーだと、一帯は立入禁止だ。交戦する気がないなら投降しろ』
　アランは舌打ちをした。詳細を話せば理解してくれるかも知れないが、女王の話をすれば混乱する可能性の方が大きい。素直に離脱するより他にない。
　ラギメトルは電導刃を持っている補助腕を作動し、肩をつかむモカラの腕を切断した。モカラは想定外の行動に動きを止めた。近づいて胸部を切り裂いて離脱した。切り裂いたモカラは機能を失い、フローラルデバイスが光を落とす。落下し、地下都市の市街区域に落ちた。
　残った１機のモカラはラギメトルを追跡する。
　ラギメトルはフローラルデバイスの出力を上げ、転移を繰り返してモカラを撒く。モカラは転移を繰り返すラギメトルに追跡する。ラギメトルは街中に入り、ビルを挟んで転移を繰り返す。下手に攻撃をすればビルを巻き込む。追跡は無意味と割り切り、転移をせずに旋回し、モカラに向かっていく。
　モカラはスピアを構え、迎撃に対応する。
　ラギメトルは転移を繰り返し、近づいていくとモカラの背面に回り込んだ。直後、モカラの腰に足刀蹴りを入れた。
　モカラはひるんで体勢が崩れる前に、ラギメトルに向けて突きを繰り出す。ひるんだ状態で繰り出したため、大きくそれて外れた。
　ラギメトルの脚部から打突機が展開する。即座にモカラの腰部に叩きつける。爆発音と共に衝撃が発生し、モカラは吹き飛んで地面に落ちて転がった。現時点で追跡してくるモカラは落とした。
　目的地のメーカーのビルに接近していく。
　アランは周辺の地図情報を映し、フローターの置き場を捜索した。フローターから物資を搬入するには直接行った方が効率がいい。フローターを地下都市へ運ぶ手段がある以上、直に停留しておく場所もある。案の定、メーカーのビルの裏に広大な土地とハッチがあるのを見つけた。転移を繰り返し、ビルの裏に向かい着地した。
　ラギメトルは腰部から、ハッチの脇にあるセンサーに向かってワイヤーを飛ばし、接続した。
　アランはカードの情報を元にハッチの認証番号を自動で入力しているのを眺めている。
　暫く経った。エラーコードが現れた。予め受け取ったコードと異なるのは当然と言える。ハッチの壁をすり抜けて転移するのも可能と言えば可能だが、転移した先に物体があればめり込む形で融合し、動けなくなる。先に空間があるが確定しない限り、転移には危険を伴う。生体センサーを起動し、女王の位置を確認する。カードを通過した履歴ではメーカーのビルの最下層を示している。
　ラギメトルは背部ユニットに電導刃を格納し、バルカン砲を展開して建物に撃ち込んだ。建物の壁と床は土ぼこりと瓦礫に変わり、穴が開いた。背部ユニットを前面に展開する。最下部に向けて突撃を開始した。床をタックルで壁を突き破るがごとく、次々と突き抜けて最下層へと進んでいく。

　ルイス達は階段を下り、誰も居ない通路を歩いていた。ＬＥＤの白く冷たい光が照らしていて、窓一つもない。四角いチューブの中を歩いている印象がある。
　先頭を歩いているトライトンの前には、立体映像で地図が映っている。
「本当に人が避難しているのですか」ルイスはトライトンに尋ねた。
「人は居ますよ」トライトンは意味深に答えた。
「私は護衛で人を守る義務がありますから、信用できない人には疑り深くなります。特に名前を偽る人の言葉を素直に信用する程素直ではないです」ニケは平然と言った。
　トライトンは鼻で笑った。「なら貴方達も同じですよ、ルイス女王。私は貴方の目的を手引きしているに過ぎません。人工無脳は出し抜けても人の目は出し抜けません。人が何に所属しているかが重要なのはデジタルの世界だけです」
　ルイスは驚いた。自分の身分を知っている。ニケの方を向いた。ニケはうなづいた。
「トライトン、いえフェルナンド議員。我々を置くに案内し亡き者にする策謀ですか」
　ニケがフェルナンドと呼ぶ男は、立ち止まって体を回し、ニケとルイスの方を向いた。「消しているなら既にやっています。先程言った通り、貴方の目的を手引きしているに過ぎません」
「目的ですか」ルイスは声を上げた。
　フェルナンドはうなづいた。「不明のマイスの存在の出処ですよ。概ね予想通りですがね」通路の突き当たりに来た。頑丈なドアがある。
「知っていたのですか」ニケはフェルナンドに尋ねた。
　フェルナンドはドアの脇にあるセンサーに手を付けた。静脈を読み取り認証を行う。同時に手に付いている脂を取り込み遺伝子解析を行って認証する。パスコードがセンサーの上にある液晶に次々と

流れて表示していく。認証を終え、ドアが重い音を立てて開いていく。「女王、貴方は光の盾計画の全容を知らない。先代の王より引き継いだ情報は雨となって議員のダムへと流れ、せき止めにかかったからだ。では何故、せき止めていたのか。私どもが知ったのは３、４年前の話です」
　ドアが開ききった。先には多重のアクリルガラスが囲っている空間と、周辺に広がる通路がある。
　ルイスとニケはアクリルガラス越しに状況を観察した。空間の下の部分は円筒を横にして半円に切った形でくぼんだ、コンサートホールと似た構造になっている。席に当たる部分には無数のカプセルが横たわっていて、ロボットが腕のピンをカプセルの脇にあるコネクタに挿して調べている。カプセルの中には裸体の人の姿が確認できる。最もくぼんだ箇所には複数のマイスが片膝を付いて座っている。腰部にはブリッジがあり、背部にチューブが接続してある。不明のマイスと同型だ。
「アッシュ＝クローンです」フェルナンドはアクリルガラスに触れた。メニュー画面がガラスに浮かび上がり、操作を開始した。３０年前にルガージ＝セイロにて物体が落下した状況が映る。「３０年前、ルガージ＝セイロに物体が落下し壊滅したのはご存知ですか」
「知っているも何も、現在調査中ですよね」ニケはフェルナンドの質問に答えた。
　フェルナンドはうなづき、アクリルガラスを軽く突いた。物体の解析データが映像と共に現れる。機械部品と操縦者に関するデータだ。「落ちた物体は２つあり、一つは特異点としてナルオンをメインストリームに切り替えた元凶です。もう一つは機能を停止した人型兵器と操縦者の遺体でした」
　フェルナンドはウィンドウを開く。搭乗していた少年の記憶の解析結果に関する内容だ。操縦者だった少年の遺体は損壊が少なく、遺伝子を分析して脳を取り出し記憶を解析した結果、断片ながらも異世界の文明を持ち、戦闘においてナルオンに迷い込む形で入ったと判明した。遺伝子は進化の過程を残すため複雑な形状を持つが、少年の遺伝子はランチボックスに入っているサンドイッチと同じくキレイに整頓してある形跡があるのが分かった。自然発生した人間ではない証拠だ。故に解析も複製も容易く行えると記述してある。
　ルイスは黙った。解析した後、機密保持と少年を辱めない為に荼毘に付して処分したのだと信じていた。
「まさか」ニケは声を上げた。ガラス越しに見える人の入ったカプセルを見て、状況を把握した。
「カプセルの中にいる人って、クローンですか。何故、大
量に作る必要があるんですか」
「本来、神の棺計画は死亡した操縦者の脳から記憶を取り出し、遺伝子を複製したクローンに埋め込んでテクノロジーや文化に至るまでを取り出す計画でした」
　ルイスの周辺に初期の神の棺計画のあらましが映る。再現した少年の容姿と記憶の断片が別のウィンドウで映った。容姿の下には不可解な漢字と共に『ａｓｈｉｂａｒａ　ｋｕｒｅｈｉｒｏ』と表示している。
　記憶とは当人が経験した内容である以上、断片かつ主観でしかない。当人でなければ解析しても理解出来ないため、記憶を移植したクローンを作り尋問して取り出す計画だった。異世界の出来事や技術を取り出して解析し、落下した物体と同じ兵器を作れば対処が出来ると判断していた。作り出したクローンはアッシュ＝クローンと呼ばず『人間レコード』と呼んでいた。クローンをデータベースのレコードを格納した機械と同じだ。
　ルイスの体が震えた。人を製造し機械も同然に扱うとは、余りに倫理に反している。
「結果は失敗でした。記憶は無意識に随時書き換えていく傾向がありましてね。複数作ったクローンは尋問に対して別個の回答をし始めたのです。埋め込んだ記憶と、現在の記憶とが混濁し始めたのです。計画は失敗でした。今までにない実験でしたから、成功すればボーナスが出る程度でしたがね」
「複製したクローンは」
「処分しました」フェルナンドは簡単に答えた。
　ニケはフェルナンドに殴りかかった。人間を家畜と同じ感覚で扱うとは、人に対する感覚が狂っている。
　フェルナンドはニケの拳をかわした。ニケはフェルナンドの無駄のない動きに驚き、拳を引っ込めた。
「私は元軍の人間ですから、格闘の訓練は受けています」
　ニケは拳を下げた。地上部で攻撃を受けたのは、自分とルイスを地下に導くためにわざと行っていたのだと気づいた。
「貴方の気持ちは分かります。しかしながら、当時は他に手段がなかったのです」フェルナンドは頭を下げた。
「計画が失敗し、取った次の手は何ですか」ルイスはフェルナンドに尋ねた。
「複合体は我々が行った手段に反発し、クローンではなく我々と同じ世界の人間で世界を守る計画に切り替えました。庭師を称する存在に機体を解析したデータを元にマイスを与え、ニウテラにて作り上げた次元回廊へ特異点を吹き飛ばし固定するシステムを守る。現在の神の棺計画です」
　フェルナンドの前に流れ図が現れる。一つの計画から光の盾計画と神の棺計画に分岐し、別個の計画の概要が映る。
「では、今いるクローンは何ですか」
「議員です。奴らが軍と組んでクローンと専用機を開発し、自国を守ると同時に神の棺計画の代理を行い権力を拡大する。廃棄した光の盾計画を利用し、水面下で行ってきました。神の棺計画から分岐し、光の盾計画として再始動したのです」
　流れ図のうち、光の盾計画の部分が拡大し詳細が映る。大量のアッシュ＝クローンを製造し、専用機であるザインガンでもって防衛を行うという内容だ。日増しに拡大する外部のクァンターへの不満に対する回答としている。貴族は自らの名誉のために戦場に行かずに済み、平民は外部のくぁンターの素行の悪さから逃れる。クローンであり忠実に教育する故に均一で士気が安定する。少年の記憶を埋め込んでいるため、同じく少年の記憶をコピーして基礎データとしているマイスとの相性もよく戦闘能力も高い。国民が望む私兵の誕生だ。
「私が計画を知ったのは２、３年前でした」

「父上が亡くなった時ですか」
　フェルナンドはうなづいた。「王が崩御された後、実績を調べ整理した段階で分かりました。王がかつて提唱したナルオンを救い継続する為の計画が、自分の利権を守るためのみに利用している。明らかに世界を憂いた王への反逆です」
　ニケはフェルナンドの計画を察した。真の目的は神の棺計画の発動ではない。計画の破壊だ。
　ルイスは一歩を踏み込んだ。「何故、最初から言わなかったのですか。人を道具の如く製造し自らの利権のみのために使用する。最初から言えば、私の口から破棄を決め」
「出来るか」フェルナンドは大声を上げた。ニケとルイスは迫力に屈した。
「王が提唱し、軍部も議員もつながっている状態だ。ウソを言わずナルオンの平和を守るためとなれば止める者はいない。自分達が傷１つつかない、理想の計画だからだ。美味い料理が炊き出しで目の前に置いてあれば、毒が入っていると分かっていても容易く飛びつくんだ。事実を話しても理想と欲望の前には意味はないと、浮世じみた説得をする気か女王」
　ルイスはうなだれた。国民も議員も自らの理想に酔っている。まして、酔いが自然に冷めた時に絶望が待っていると分かっているなら、誰も酔い覚ましなど飲まない。人は自分の心に忠実で気持ちの良い言葉でないと耳を傾けないのだ。
「私は軍に働きかけ、旧王政派を中心に議員に反逆を起こす決定を下した。計画は」
　直後に爆発音がアクリルガラスを通して響いた。フェルナンド達はとっさにかがんだ。
　爆風とともに上方から手負いのラギメトルが降りてきた。空中で静止し、周辺を見回す。
　チリや破片が次々とカプセルの上に降りかかる。アクリルガラスで出来ているために破壊はしないがロボットにはダメージとなって潰れていった。
　アランは降りてきた場所を読み込んだ。機密扱いとなっており黒塗りとなっているがデータベースには存在している。カプセルに入った自分に似た姿の人間を見て確信した。自分が過去に見た計画の概要は、未だに継続していると気づいた。アクリルガラス板越しにいるフェルナンド達を確認した。
　ニケは恐る恐るアクリルガラスの向こう側をのぞき見た。天井に穴が開いていて、ラギメトルが空中で固定した状態で自分達の方を向いている。
　アランは、アクリルガラスに映っているデータからアクセスが可能だと気づいた。フローラルデバイスの出力を落とし、量子通信が可能な状態にしてから無線回路の一覧を映した。強力な回線に割り込む。ローカルな回線は傍受できる範囲が狭い関係から暗号を随時切り替える必要はない。固定化しているので解析は容易に出来る。予想通りの時間で解析が終わり、回線に割り込む。
　アクリルガラスにアランのデータが映った。フェルナンドは起き上がり、アランの顔を見た。クローンのデータと同じ黒髪だ。
『女王陛下、依頼によりジェイクジブラスより救出に参りました』アランの声が響いた。
　ルイスはアクリルガラスの方を向き、自分の胸に手を当てた。「私をですか、上では何が起きているのですか」
『査察団に偽装したクァンターが、防衛側のフリーのクァンターと交戦している』
　フェルナンドは顔をしかめた。議員が開示を拒むのを想定して複合体が送り込んだと推測した。
「君は査察団に属しているのか」
『両方に属していない。女王を救出する依頼を受けて来ただけだ』
「女王を助けて次に何をする」フェルナンドはアランに尋ねた。
『ジェイクジブラスから脱出し、アリス議員の乗っているフローターと落ち合う』
「議員が手を回したか」フェルナンドはうなった。
　フェルナンドはアクリルガラスに触れ、メニュー画面から、立体地図を展開する。「今立っている場所から下にザインガンと呼ぶマイスがある。所属がガルキアである以上、少なくとも半分を敵に回さずに済む。アッシュ＝クローンの専用機だが仮説が正しければ君でも操縦出来る。私達は降りてブリッジに向かう」
『保証は』
「逃げたとしても君が追跡する。私も人間だ、命が惜しい」
『ウソでないのを期待する』ラギメトルは下降し、通信が切れた。
「女王、コントロールセンターで認証を。次いでブリッジに向かいます」フェルナンドは女王の手をつかもうとした。
　ニケはフェルナンドの手を払った。
　フェルナンドはルイスに失礼な行為をしたと気づき、目を背けた。
「私が認証を、何故です」
「女王以外に認証出来ない仕組みにしました。でなければとっくに地上に向けて動いています」フェルナンドは、アクリルガラス越しにクローンのカプセルとザインガンの姿を眺めた。
「ジェイクジブラスが戦場になっているのに動かせないとは、何故ですか」
「議員の私兵ではないからです」フェルナンドは奥へと向かって歩いていった。
　ルイスとニケはフェルナンドの後をついていった。
　コントロールセンターは通路から階段を降りていった先にある。フェルナンドはドアの脇にあるセンサーに触れた。静脈と指の脂による遺伝子認証が終わり、ドアが開いた。
　壁が透明なアクリルガラス張りの壁となっていて、コンソールが壁に並んで置いてある。椅子がコンソールに合わせておいてある。フェルナンド達が入った途端、天井の電灯が部屋を照らしコンソールの上に情報を示すウィンドウが一面に展開する。
　ニケは周囲を興味深く見回した。細かく手を動かし頭に情報をインプットしていく。
　ルイスは部屋の中央に立った。ウィンドウが部屋一杯に幾重も展開している。
　フェルナンドはルイスの前に来た。「緊急時に手動操作を行う為の設備です。認証を行いマイスの初期認証を解除して下さい」
　ルイスはコンソールの前に来て見回した。メニュー画面が浮かんでいて、何が何に連携しているのか分からない。

　ニケがルイスの隣に来た。
「分かりますか」
「コンソール自体は軍が使っていたのと似ています」ニケはコンソールに手を付いた。下にキーボードが浮かび上がり、操作を始めた。メニュー画面からデータベースを経由して深層へと入っていく。深層に入るにしても網の目になっている上に同じデータが出るだけだ。複数の桁のある数字の鍵を合わせてい気分になり、次第に苛立っていく。
　フェルナンドはルイスと異なる場所のコンソールの元に向かい、操作を始めた。次々と深層に入り、認証画面に入る。「女王、画面に入りました。認証をお願いします」
　ニケは作業をしている手を止めた。フェルナンドが作業を完了したので、自分の作業を続ける理由がなくなった。手を離した途端、深層のウィンドウが次々と閉じていった。
　ルイスはフェルナンドの隣に向かった。コンソールには認証を行うエリアが映っている。ルイスはエリア内に手を付いた。ルイスの静脈を読み取り、認証画面が切り替わる。次々とウィンドウが現れ、ザインガンにかかっていたフローラルデバイスのロックを解除していく。
「終わりですか」
「フローラルデバイスに火が入る。稼働には時間が掛かるが、到着する頃には動いている」
「時間は」ルイスはフェルナンドに尋ねた。
「マイスの専門家ではないので」
「１５分です」ニケは明確に答えた。「データベースで見ました。停止状態からアイドリングに入るまでの時間なら、１５分程度だと記述がありました」
「１５分か。カタログスペックは理想値だから、実際には２０分はかかる」
　ニケはうなづいた。
　フェルナンドは透明なカードをスロットに挿入し、浮かび上がったキーボードをたたいた。次々とデータが映り、カードへコピーしていく。本来はコピーに何重ものプロテクトがかかっているデータだが、ルイスが認証した為にマイスの稼働と共に関連するデータの鍵も解除した。コピーは一度しか出来ないが問題はない。一度で十分だ。
　コピーが完了し、ウィンドウが閉じていった。フェルナンドはカードをスロットから取り出し、付いているボタンを押した。カードにコピーしたデータの映像が透かしで映った。僅かな笑みを浮かべ、胸ポケットに入れた。腕時計型の端末を操作した。立体地図が映る。ルイスの方を向いた。「案内します」コントロールセンターを出ていった。ニケとルイスは後に続いた。

　ラギメトルはザインガンが置いてある、空間で最もくぼんだ場所の脇に着地した。片膝を付き、フローラルデバイスの出力をアイドリングまで落とした。光が鈍くなった。アランの体を固定している装置が外れて操縦席が腰の背部から突き出る形で出る。床に向けてワイヤーが降りる。
　アランはカードをスロットから抜いて操縦席から立ち上がり、ワイヤーに付いた足場に足を乗せた。ワイヤーが徐々に下がり、床に付いた。アランは足場から飛び降り、端末を取り出して操作した。ラギメトルがアイドリング状態から稼働停止状態になる。置いてあるカプセルを見た。自分と似た姿の、黒髪の若い男が裸体で中に入っている。動かず、目を閉じている。一見して死体と何ら変わらない。カプセルには１６進法で番号が振ってある。内部は呼吸と栄養補給が可能な液体で満ちており、接続しているパイプを介して排泄物の処理を行い、酸素濃度を適切に保っている。髪の毛は水流により適当な長さに切断している。ザインガンに搭乗し、戦闘を行うだけの人形でしかない男達に哀れみを覚えた。１５歳の時に見たデータで出自を知ったが、実際に目の当たりにしたのは初めてだ。カプセルの中にいる人間と違って自我と名を持ち、自分の意思で戦闘を行っている。運が良かっただけに過ぎない。
　ザインガンから鈍い音が響いた。遠隔操作で火が入ったのだ。マイスはメンテナンスを考慮し、外部からでも認証さえすれば火を入れる位の操作は出来る。
　アランはザインガンの元に向かい、はしごを伝って操縦席とつながっているブリッジに上がった。
　ブリッジは鉄骨製で、腰の背部にある操縦席は開いた状態で、後部にカプセルを乗せる為のプラグが付いている。
　アランはラギメトルを見た。両腕が欠けた状態で、背部のバルカン砲の銃口は黒ずんでいる。ため息を付いた。「悪いなマム、せっかくのプレゼントを壊しちまった。言葉も出ねえよ」カプセルのプラグと操縦席との接続を確認した。簡単な電気接続で、操縦席が格納した場合に外れる仕組みになっている。普通の人間が搭乗するには問題はない。ザインガンを見回した。かつて乗っていたグルパスと関節の板バネやフローラルデバイスの構造が似ている。操縦に難があるのか不安だが、現状、脱出するに当たって不利な状況を背負う訳に行かない。火が入り、稼働状態になるまでに時間がかかる。フローラルデバイスの光量から、経験で可動出来るまでのエネルギーを生産しているかを認識している。徐々に光量が上がっていく。
　暫く経った。アランはザインガンが稼働可能になったと判断した。同時にフェルナンド達が駆けつけてきた。「認証は」フェルナンドに尋ねた。
「遠隔操作で解除した」アランは後からついてきたニケとルイスに目をやった。「女王は」
「私です」ルイスは自分の胸に手を当て、次にニケの方に手をかざした。「近衛兵のニケ＝ローパーです」
「ニケ＝ローパーです。女王の近衛兵です」
「護衛を一人でこなすとはな」アランは開きっぱなしの操縦席に乗り、端末を格納し、スロットにカードを挿入した。操縦席が作動した。
　ニケは違和感を覚えた。「１枚しか入れないんですか」
「認証のダミーカードを入れる必要はない」フェルナンドは転がっているカプセルに目をやった。

「仮説が正しければ、同じだからな」
「同じって何ですか」
「カプセルを見ろよ」アランはニケに話しかけた。
　ニケはカプセルの中の男とアランとを見比べた。カプセルの中に入っている男と、アランの姿は似ている。黒髪は偶然でもありえない程に非常に珍しい。
「仮説、仮説って議員止めて科学者が性に合ってますよ。いい人居ますから紹介しますよ」アランはフェルナンドにぼやいた。
「議員の方が性に合っている。近々肩書が外れる予定だがね」
「再就職先のご参考に」アランは操縦席に乗った。背部にスペースがある。ルイスの方を向いた。
「後ろに乗って」
「３人はいけますか」ルイスはフェルナンドの方を向いた。
　ニケは背部のスペースを見て驚いた。せいぜいが２人分しか空いてない。「重量オーバーですよ」
　アランは笑みを浮かべた。「乗ってもないのに言うな。三、四人の体重なんざマイスにとって誤差でもなんでもねえよ」
「トラックの運転手ですか」ニケはぼやいた。
　ルイスは座席の後ろのスペースに立って乗った。座席に手をかけた。後ろにニケとフェルナンドが乗った。
　アランは操縦席の脇のボタンを操作した。操縦席はザインガンに格納した。
　真っ暗な状態でシステムが起動した。脚部と腕部に筋電位を検知する装置が覆いかぶさり、頭部にもフード状のセンサーが被さった。脳波と記憶による認証を開始した。アランの脳裏に埋め込んだ『アシバラ』の記憶が映る。同時にウィンドウにも脳裏に映っているのと同じ『アシバラ』の記憶が映る。間もなく消えて認証が終わる。ザインガンはアランを『アシバラ』として認証したのだ。
　全体にザインガンから見た光景が映り、立体映像で情報が展開する。
　フェルナンドは確信した。アランは最初期に作ったクローンの一体で、何かしらの手段で処分を免れてクァンターになり今に至っている。
「ザインガンを出すハッチがある。ガルキアの識別のままなら回線をつなげば問題なく開く」フェルナンドはアランに声をかけた。
　台座のタグが外れた。ザインガンが拘束を解いて立ち上がる。
　アランは立体地図を展開し、空間から天井のハッチを探す。予めザインガンにインプットしてあるデータからハッチの座標を見つけ、転移し。動作の反応はグルパスとほぼ同じだ。
　ザインガンは転移を繰り返し、天井のハッチの前に来た。ハッチに搭載してあるセンサーがマーカーを検知する。ガルキアのザインガンだと分かるとハッチが開いた。開いたハッチから飛び込み、通路を上がっていく。上がりきって地下部に出た。ハッチが閉まる。マイスがまだ入り込んでいないのか、警備のモカラが飛び交っているだけだ。
　ニケはモニターを通して映る状況を見て、不安になった。「モカラも敵に回すんですか。女王がいるって言えば見逃してくれますよね」
「ニケと言ったな。薄汚れた胡散臭いクァンターが知らない兵器に乗って、女王様が中にいるから誘導して下さいって相手が言ったとする。素直に従うか」
　ニケはうなった。「いえ」
「不正解だな。無視するか様子見をするかだ。何にせよ攻撃はしない」
「何でですか」
「本当かも知れないからだ」
　アランは自分が地下都市に来た通路のあったハッチに向かう。
　モカラはザインガンに気づき、転移を繰り返して近づくもアランの予想通り１００メートル程の距離からは近づく気配がない。
　ザインガンは天井にあるハッチの位置を見つけ、転移を繰り返して向かった。閉じたハッチが徐々に開く。開き切る前に上昇して通路を通っていく。
　ザインガンを監視していた２機のモカラはザインガンがハッチに入っていくのに動きがなかった。
　モカラの一機がもう一機のモカラに触れた。
『見逃すのですか』
『ガルキアのマーカーの上、先に攻撃をしてない。近衛兵がひた隠しにしていた援軍じゃないのか。確定でない限り手を出すのはまずい。下手をすれば始末書どころか上から辞令が飛ぶぞ』モカラは触れている手を払い、ハッチから離れていった。
　一緒にいたモカラも後をついていった。
　ザインガンは通路内を転移を繰り返して移動し、地上に向かっていく。
「クァンターの人ですか。質問いいですか」
「アランだ」
「アランさん、乗る時にクローンと同じって言ってましたよね。貴方は何で自分が同じだって言ったんですか」
「１５の時に計画をのぞき見して知った」
「のぞき見だと」フェルナンドは驚いた。
「親がアリス議員でな、自分が神の棺計画で作った記憶と遺伝子を複製したクローンだと知った。親は自分を道具として育ててたとして、家出してクァンターになった」
　フェルナンドはうなった。「君は道具になるのが嫌なのに、何故クァンターになったんだ」
「言っても分からんさ、足元見てない上流階級の人にはな」アランは吐き捨てた。
　ルイスは転移を繰り返していく光景を見ていた。足元の光景を見て、自分が落ちるのではないかと不安になる。
「アラン、君は議員のいるフローターに向かうと言ったな。議員は女王の救出以外に何を求めている」

「依頼人諸々に関しては機密事項だ。もしかしたら、別の依頼人かも知れない」
「仮にアリス議員に会えるとなれば、会見をしたい。大丈夫か」
「ついてから聞いてくれ」
　ザインガンは通路を抜け、地上部に出た。日の光が差し込んでくる。日が傾き、空が黄色に染まり始めていた。戦火はジェイクジブラス全体にまで飛び火しているが、マイスの数は少ない。互いに補充していない以上、少なくなっていくのは当然だ。上空へと転移を繰り返す。他のマイスが捕捉すると厄介になるからだ。脱出時は戻る必要がある以上、戦闘は避ける必要がある。ジェイクジブラスの街全体が見渡せる程に上昇していく。モニターを通してジェイクジブラスの街が小さくなっていくのが見える。
　アランはハンスは無事かと心の奥底で心配になった。目の前に立体地図が浮かび、フローターのある座標が重なって映る。目標の位置にまで上昇したのを確認した。
　ザインガンはフローターのある場所へ転移を繰り返して移動する。
「クローンを製造していたのは父、いえ先代の王の頃からですか」
「はい。当然、専用のマイスであるザインガンも同時期に開発を完了したグルパスを元に開発しています。話した通り、クローンは本来対特異点の部隊に使う予定でした。我々にも不明な部分があるため、かつて遭遇した記憶を持つクローンを使うのが妥当と判断したのです」
「人を道具として製造して使う。クローンといえど人である以上、人権はあります。使い捨ての道具にするなど」
「女王、クァンターならいいんですか」
　ルイスはアランの言葉に驚いた。
「クァンターもクローンも、やる作業は同じです。最終目標は特異点を次元回廊に送って固定するのですからね。なら現地の人間よりクローンを製造し、最初から使い捨ての道具として割り切った方が楽です。クァンターも使い捨ての道具ですよ、人権があってもなくても一緒です」
　アランの言葉にルイスは眉をひそめた。「同じなら何でクローンではなく、クァンターに作業をする計画にしたのですか」
「人道上の問題があるのは確かですが、融通の利かなさと実戦経験がなさが欠点です」
　アランはフェルナンドの言葉にうなづいた。ザインガンと推測するマイスとはニウテラにて交戦した。僅かな数で街を占拠するまでに追い込む一方で、戦闘では単に強いだけでしかない。集団行動を得意とし、個体の戦闘能力は低いのは無人機の制御に近い。ニウテラに駐留していたとウワサを聞いたが、実戦経験を積む理由だと捉えた。
　転移を繰り返し、ジェイクジブラスの領域から離れていく。地図上に映るフローターの座標が近づいていく。フローターの位置に重なる形で降下していく。ガルキアとスプレアの国境付近で、低木が生い茂る森の中にフローターが着地しているのが見える。
　ザインガンはフローターの隣に着地する体勢に入り、指定した位置に着地した。土ボコりが舞い散る。フローラルデバイスの光が弱くなり、膝を付く体勢になった。操縦席が開き、ワイヤーが垂れ下がった。
　ニケは足元を見た。地面まで離れている。落ちないか不安になった。
　アランはニケの方を向いた。「ワイヤーを握って足場に足をかけて降りるんだ」
　ニケは恐る恐るワイヤーを握りしめ、足場に手をかけた。徐々に下がっていく。地面に飛び降りても問題ない高さになった時に飛び降りた。ルイスとフェルナンドが同じ手段で降り、最後にアランが端末とカードを取り出して降りた。
　アランは端末を操作した。操縦席を格納した。
　フローターのタラップが降り、テレスがアリスを伴って降りてきた。
　テレスはザインガンを見て、眉をひそめた。出て行った時と異なるマイスだ。
「アラン、ラギメトルは」
「やむなく置いてきた」
　アリスはアランの声がした方を向いた。「依頼を達成したのだから十分だ。マイスは金さえあれば手配は出来る、当面廃業だがお前は軟禁状態になるから気にするまでもない」
　アランは渋い表情をした。神の棺計画の重大な駒である以上、依頼が終われば報酬を受け取りフォルタジアスに軟禁状態になる。うかつに外に出てマイスごと失っては困るからだ。
　テレスはマイスを見回した。「記憶にないマイスですね」
「ザ
インガンだ。ガルキアが複合体と関係なく光の盾計画のために設計開発していたマイスだ。アッシュ＝クローン、いや最初期の計画にて製造したクローンによる操縦での運用を前提にしている」フェルナンドはアランの前に出た。
　アリスはフェルナンドの声に唸った。「フェルナンド議員、お前もいたか。運用とは何だ」
「議員、目が見えない以上作業が出来ませんから、付きの者に頼みます」フェルナンドはアリスの隣にいるテレスの方を向き、透明なカードを取り出して差し出した。「光の盾計画の全容です。指定した回線にて公開して下さい。目的が終われば戦闘も終わります」
「戦闘って、ジェイクジブラスで何が起きているのですか」ルイスはフェルナンドに尋ねた。
「査察団に偽装したクァンターと、防衛側のクァンターが戦闘している。防衛側は議員が雇ったフリーのクァンターだ」アランは面倒臭げに言った。
「戦闘は互いに目的が達成できていないから発生しているのです。一方の目的が達成すれば戦う理由はなくなります」
「処理を頼む。私は突っ立っている。何かあればアランがいる」
「はい」テレスは返事をし、フローターに向かった。
「フリーのクァンターを信頼するかね」アランはぼやいた。
「他に信用出来る人間は居ない」
　アランはため息を付いた。

「光の盾計画のカードが表になり瓦解し、神の棺計画に組み込む形になります。王が求めた本来の計画に統合していく形となり、保身を図った議院の敗北となります」
「お前の計画通りに運んだと言う訳か」アリスはフェルナンドに尋ねた。
　フェルナンドはうなづいた。「成果物によるニウテラの壊滅は想定外でしたが、占拠により情報が表になり、侵攻と交戦により部品が複合体へ流れ査察が始まりカードが表になる。大まかな計画はロードマップの通りに進みました」
　アランの端末から呼出音が響いた。端末を取り出し、回線を開いた。テレスから連絡があった旨の表示が浮かんだ。アランはテレスと回線をつなぐ。「テレスか、用件は」
『指定した回線に入りました。データを流します』
　メニュー画面が変わり、光の盾計画の概要とデータが映る。大まかな点は最深部で見たのと同じだが、更なる詳細なデータが映っている。背部にガルキアの紋様が入っている。最重要機密の印だ。
　ルイスはニケを伴ってフェルナンドの前に出た。「貴方は私ですらも知り得ない情報を利用し、重要機密を流すのが目的だったのですか」
　フェルナンドはうなづいた。「議員の私兵になる前に、軍部と組んで公開しナルオンを救う戦力として提供する。王の意思を体現する為に利用しただけですが、現在の状況にそぐわないのなら只の国家機密を漏らした売国奴です」
「貴方の仰る通りです。機密となっている情報を漏らした上、議員と旧王政側と派閥争いのためにスプレアや複合体を巻き込んだ元凶である以上処罰する必要があります。フローターの持ち主に依頼し迎えを出して帰還した後、逮捕して取り調べをします」
「承知の上です、女王」フェルナンドは返事をした。国家の機密をバラす売国奴になろうとも、王の遺志を体現できれば首をも差し出す覚悟はある。私に同意した軍部やメーカーの人間も同じだ。正しさのミームに従って動いたのだ。既に道は決まっている。恐れはしない。
「逮捕するとなれば、王都に護送するのか。私としても話が聞きたい。フェルナンドの身を借りてもいいか」アリスはルイスに尋ねた。
「壊さずに返すなら」ルイスは明確に言った。
　アリスは笑みを浮かべた。「壊すまでもない。役目を終えた人間は素直に話すよ。隠す理由も責任もないのだからな」
　アランはルイスの方を向いた。
「持ってきたマイスはガルキアの所属だから、返す必要があるんですよね。グルパスは複合体の所属で使えないので、自分で持ってるマイスは置いてきたラギメトルしかない。修理の必要があるので回収しますから、開ける日付を教えて下さい」
　ルイスは眉をひそめた。開けるにしてもクローンを含め調査をする必要があるので、簡単に内部を公開し取り出す訳に行かない。「調査に時間がかかりますので、クァンターの側で回収するのはほぼ無理と言ってもいいです。私どもで回収し修理して返還します。間が空きますが、乗ってきたマイスを使って下さい」
　アランはため息を付いた。「不明のマイスである以上、解体するのが自然ですよ。何が仕込んであるか分からないですし、技術解析の必要もありますからね」
「信用出来ないと」
「当たり前です」
　ルイスはニケの方を向いた。ニケはルイスの目線に気づいた。「戻るまでの間、補償としてニケを預けます。問題があれば処分しても構いません」
　ニケはルイスの言葉に驚いた。「待って下さい、女王。私は片時も離れずそばにいるのが職務です。離れろとは近衛兵としての任を解くも同然です」
「ニケ、私は事後処理の為に議会と王宮に缶詰になります。外の情勢を知る機会はほぼないのです。貴方が私の目となり、状況を感じ取って来て下さい。貴方の記憶力を持ってすれば容易です。いいですか、貴方にしか出来ない特別な任務です」
　ニケはアランの方を向いた。寄宿舎に入る前の記憶が脳裏に浮かぶ。アランと同じ年頃の父親に暴力を受けていた記憶が正確に現れた。父親の姿とアランの姿が重なる。不安になるが、自分に手を差し伸べてくれたルイスの頼みなら、断るなど出来ない。「了解しました女王、複合体に事情を話します」
「私からも辞令を出しておきます。頼みましたよ」
「はい」ニケはルイスに頭を下げた。
　アランはニケを見た。ルイスと同い年の少女を預かるなど大丈夫なのか。「女王の命令となれば従います」白々しく言った。
　開きっぱなしのメニュー画面が切り替わった。データの詳細が更に映っている。

　ジェイクジブラスの戦闘が止まった。幸いにも中枢までは届かず、建物の損壊は周辺区域のみに留まった。複合体が求めているデータが露わになった為に防衛側のクァンターは戦う意味を失い、同じく査察団に偽装していたクァンターも目的が達成した為に戦う理由がなくなった。以後は互いに損壊したマイスや動けなくなったクァンターの回収や救護を行い、撤退する作業に入った。
　ナルゲムは大破したラギメトルを回収していた。
　クァンターは操縦席を緊急措置でこじ開け、中にいるハンスを回収した。気を失っているが見た目にダメージはない。端末を取り出してハンスを照合し、身分を確認する。ナルゲムが持ってきた救護用のコンテナに入れ、ナルゲムに指示を出して離れる。
　ナルゲムはコンテナを補助腕で回収し、離脱した。ジェイクジブラスの外れに設けた急造の病院に運び込むためだ。

残ったマイスはラギメトルのパーツを回収していく。敵味方問わず、マイスとクァンターは貴重な資源なので回収出来る限りは回収し再利用するのが基本だ。特に雇兵のみで構成した組織は所属から敵対しているだけなので、戦闘をする理由がなければ所属に関わらず回収して一旦保護するのが基本になる。最も、保護した先に関しては保証出来ないが、即座に命を奪うよりは幾分マシだ。
一方、ファルクは迎賓館の中にある部屋の一室で、次々と映るデータを目の当たりにして笑みを浮かべた。フェルナンドが提唱した目的は完了した。王の遺志を表に出し、私兵にならず計画を統合する形で引き継いだのだ。間もなく自分や関わっているメーカーや軍にも捜索のメスが入る。地位も名誉も失うが、元より腹に決めていたので問題はない。人は覚悟がある限り、いかなる出来事にも不安にならず正面から臨む能力を持っている。席を立ち、間を後にした。捕まれば当面風呂にも入れなくなる。自由が利くうちに、出来る部分を埋めておく必要がある。

１週間後、複合体は光の盾計画と神の棺計画の概要を公開した上で統合すると発表した。更にアッシュ＝クローンとザインガンは複合体の所属となり、対特異点の兵力とする方針も決まった。
以降はガルキアとスプレア、複合体は合同で神の棺計画の続行に取り掛かっていく。